

Reexamination of the Nomadic Society : Between Lenin's reindeer and private reindeer : a consideration on reindeer herders' animal classification, recognition, and possession in the Verkhoyansk region in Siberia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高倉, 浩樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003533

レーニントナカイと個人トナカイの間で
——東シベリア・ベルホヤンスク地域における
家畜トナカイの分類・識別・所有をめぐる考察——

高 倉 浩 樹*

1. 序
2. ベルホヤンスク地域における「伝統的」トナカイ飼育の展開
 - 2.1. 調査地の状況
 - 2.2. 内発的発展としての大規模トナカイ飼育の群管理技術
 - 2.3. 革命以前のベルホヤンスク地域のエヴェンとヤクート
3. 農業集団化からソ連の崩壊へ
 - 3.1. 定住地の設置と農業集団化
 - 3.2. レーニントナカイと個人トナカイの出現
4. 家畜トナカイの分類の諸相
 - 4.1. 資料について
 - 4.2. 性・成長段階に基づく分類
 - 4.2.1. 家畜トナカイに対する性・年齢類別名称の特徴
 - 4.2.2. 雄は成長すると去勢雄となる?
 - 4.2.3. 出産年齢と雌
 - 4.3. トナカイの体色分類
 - 4.4. 角の分類と角の加工
 - 4.5. 耳印と個人トナカイ
 - 4.6. 家畜トナカイ分類原理の特質
5. トナカイの個体識別
 - 5.1. 調教されたトナカイ
 - 5.2. 人と家畜関係における調教の意義
 - 5.2.1. 調教によってつくられる交通用トナカイ
 - 5.2.2. 調教個体と人との関係
 - 5.3. 家トナカイの個体名
 - 5.3.1. 個体識別と調教済み個体への命名
 - 5.3.2. 個体名の意味
6. 考察
 - 6.1. 調教がもたらす人と家畜関係
 - 6.2. 群の行動管理に必要な家トナカイとしての交通トナカイ
 - 6.3. 個人トナカイを作り出す牧夫たちの戦略
7. おわりに

* 東京都立大学人文学部, 国立民族学博物館共同研究員

Key words : Siberia, Reindeer breeding, Soviet Style animal husbandry, animal classification, human-animal interaction

キーワード : シベリア, トナカイ飼育, ソビエト的畜産業, 家畜分類, 人・家畜関係

1. 序

ソ連崩壊後、計画経済の農業部門での要であった国营農場ソフホーズは解体した。「ソビエト極北の農業の重要な一部門」と位置づけられていたシベリアのトナカイ飼育もまたその波にのまれ、多くは「農業企業体」や「遊牧氏族共同体」といった畜産経営事業体を再編し、新たな経済活動を試みている。「遊牧氏族共同体」といういささか古めかしい名称に象徴されるように、新たな経営システムにおいては家畜トナカイが個々の世帯で所有され、飼育自体も「家族」単位でおこなわれ、革命前の「伝統」的な形に戻ったと人々に評価されている。しかしソビエトによる70年にわたる社会主義経済下において、トナカイ飼育の社会経済的位置づけ自体が大きく変化したことはいうまでもない。現在の家畜の所有や群管理のあり方は単純な伝統回帰ではなく、脱社会主義化＝市場経済への包摂過程の中で検討すべき状況である¹⁾。

1930年代、「ソビエト北方少数民族」に対してマルクス＝レーニン主義的な発展段階論から「数千年を飛び越す」(シシュロ 1995: 152)と宣伝された「社会主義的経済再建」の一つの「成果」は肉と毛皮を生産する一次産業としてトナカイ飼育を生み出したことである。畜産業としてのトナカイ飼育については主に畜産学の立場から生産の向上を目的とする分析がおこなわれ (Zhignov 1968), 一方ソビエト民族学はむしろ農業集団化以前の伝統的トナカイ飼育のあり方を研究対象とし、集団農場・国营農場で行われるトナカイ飼育のあり方についてはソ連の公式イデオロギーを繰り返す以上のものではありえなかった。

ソビエト民族学の優れた成果である起源研究や比較研究は、言語学の語族分類を単位とした住民分類を民族 (этнос=ethnos) として、19世紀後半から20世紀初頭のソビエト革命以前の状況を民族誌的現在で固定化するかたちで生み出されてきた。とりわけトナカイ飼育といった生業研究の場合、上記の民族を単位とした研究が蓄積され、帝政ロシア植民地主義、ソ連時代の民族政策・政治経済政策によって大きな影響を被っていた地域社会あるいは生業・生産活動の実践の場へ視点を向けたものではなかった。ソビエト社会主義は地域社会を再編し、行政システムのなかに組み込む形で実現されるものだった。そこでのトナカイ飼育の変化を扱うならば、ソビエト民族学の「民族」よりもむしろ、地域を単位とする分析が必要なのである。

本稿はこうした立場にたち、地域的には東シベリア内の、主な住民がエヴェンとヤクートからなるベルホヤンスク地域のトナカイ飼育を対象にする。ソビエト民族学が

単位としたエヴェンそしてヤクートという公的民族毎の「伝統的トナカイ飼育」研究をも参考にしながら、自らが行った現地調査²⁾の結果をふまえ、それが社会主義下でどのように変容し、さらに現在の状況へどのように至るのか、牧民たちの群管理、とりわけ家畜の分類・識別のあり方を中心に考察していきたい。

2. ベルホヤンスク地域における「伝統的」トナカイ飼育の展開

2.1. 調査地の状況

筆者が調査を行ったのは、東シベリア、ベルホヤンスク山脈東麓に位置し、現在、行政的にはロシア連邦を構成するサハ共和国北部のエヴェノ・ブィタンタイ地区(район=улус)内の中心集落バタガイアリタである。この地区は1930年代にはサクリール地区にあったが、1960年代には分割され、その大部分はベルホヤンスク地区(район)に含まれていた。脱中心化と民主化が進められたペレストロイカ期に自治運動が高まり、1989年エヴェンの民族自治地区として独立した(Кузнецов и Миссонова 1993; Vitebsky 1989; 1990a; 1992)。1994年1月1日現在、地区全体の人口は3039人、調査地の人口は1720人、世帯数は627である。主な住民はチュルク系のヤクートとツングース系のエヴェンで(民族比は3:2)、両者をあわせて村の住民の9割を占める。村で日常言語はヤクート語であり、エヴェン語を自由に使いこなせる人は極少数である。主な産業はソフホーズを受け継いだ事業体によっておこなわれているトナカイ飼育や牛馬飼育といった畜産業である。ソ連時代は狩猟業・養狐業も行われていたが、当時からトナカイ飼育が家畜数においても圧倒的な数に達し、村の経済を支える主要産業であった。村の住民にとって、職業としてトナカイ飼育に関係するかどうかは別として、基本的な食料はトナカイの肉であり、トナカイの毛皮は背革の敷物、手袋や毛皮のブーツの原料として使われている。現在、12000頭ほどのトナカイがいるが、村から離れた放牧キャンプで群の行動管理に直接従事する牧夫は40名程である。約1700人の人口に対して数パーセントの牧夫が村の基幹産業を支えているのである。

2.2. 内発的発展としての大規模トナカイ飼育の群管理技術

革命以前、小規模のトナカイ飼育で狩猟が主な生業であった状態から、現在のような村の生産基盤を支える畜産業としての大規模なトナカイ飼育に移行したこと、こう

した変化に対して、ソビエト民族学は十分な説明を与えてこなかった。「非資本主義的発展の道」を進む「ソビエト北方少数民族」という位置づけはあったにせよ、ソビエトのイデオロギーを分析するようなものではなかったし、当時そうした試みは不可能であった。彼等にとって現在へとつづいていく生産構造の変化は1930年代の農業集団化というソビエト権力による「社会主義的経済」を打ち立てることによってもたらされたと考えられてきた。これに対し筆者は現在当該地域でみられる大規模畜産的なトナカイ飼育というものを、むしろ現地の人々の内発的発展ともいうべきプロセスから分析しようと考えている。

確かに村の経済基盤を支えるといった畜産業としてのトナカイ飼育は、定住化そして生産手段の共有化つまり富の再分与を強制的にし、自発的にせよ、なしえた農業集団化によってもたらされたことは間違いない。しかし、大規模な家畜を飼育する牧民たちの群管理技術そのものは、ソビエトが与えたものではなく、彼等の内的な歴史プロセスの中で編み出されたものだと考えられるからである。

そのことをまずソビエト民族学におけるトナカイ飼育研究の議論とりわけ生産様式と、人と家畜の関係の二点からの中から探ることにしたい。ソビエト民族学においてシベリア全体のトナカイ飼育は、その生産様式の視点から大きく二つのタイプに分けられてきた。一つはa) ツンドラで肉畜中心の大規模飼育、つまりトナカイ生産経済である。もう一つはb) タイガでの小規模役畜飼養中心で狩猟に比重を置く型である(Левин и Чебоксаров 1955; Khazanov 1983: 41; Крупник 1988; 1992; 1993; 佐々木 1991; 松園 1962)。とりわけ前者については、帝政ロシアのシベリア植民地化の影響下で成立したことが知られている。もともと後者b)と同様に小規模の家畜トナカイを使った狩猟を生産基盤とする社会であったが、植民地化による社会の安定やトナカイの生育に好都合であった気候の寒冷化が進んだことを受けて、18世紀後半にシベリアの両端、東のチュコット半島やカムチャツカ半島のチュクチ、コリヤークと西シベリアのネネツ社会の一部で、自ら飼育する家畜トナカイに全面的に依存するトナカイ生産経済が同時に成立したというものである(Крупник 1976; 佐々木 1984a; 1984b)。

こうした分類を元に人と家畜の関係については以下の様に理解されてきた。第一にa) タイプの場合、家畜が十分人になれておらず「半家畜」といった評価がされたことである(Bogoras 1901: 87; Leeds 1969: 93)。例えばチュクチの民族誌において、家畜トナカイが野生群につれていかれてしまったり、トナカイが数えられないことや「すべてのトナカイを見かけで把握できないこと」(Bogoras 1904-09: 51, 79, 82)と

いった面は古くから知られている。しかしながらその正反対の性質も報告されている。家畜の体色分類や性・年齢別分類や、体の特徴から個体名が与えられていること、さらに雌が仔たくさんであるかどうかを把握するために3～4世代の系譜をおぼえていること、マッチ棒ほどのサルヤナギの小枝で角の束をつくり、その角一本一本が特定の家畜トナカイを意味する身分証明のようなもの（グィチグィイ・グィルグィル）があったという具合である（Bogoras 1904-09: 74-79; Попов 1948: 67; レベジェフ・シムチャンコ 1990: 87-88）³⁾。

そうした性質があるにも関わらず「半家畜」という位置づけがされてきたのは、家畜個体への識別が技術として存在するにも関わらず、「群としての輪郭が外に対して不分明」（谷 1996: 246）だったからにはほかならない。あるソビエト民族学者によれば「(牧民たちの家畜トナカイに対する) 識別に関しては著しい能力が認められる。と同時に彼等には自分の群の中でどのトナカイがいなくなったのか言い当てることのできない」（Попов 1935: 199）というものだった。そうした中、毎年紛失トナカイを出しながらも、ツンドラという開けた地形であるが故に、大規模な群行動管理＝囲い込みが可能であったと理解されてきた⁴⁾。

これに対しb)のタイガ小規模型では、家畜トナカイが十分に家畜化されていることで知られている（Lindgren 1935: 225; Mironov 1945: 398; シロコゴロフ 1941: 62）。「ツングースの自らの馴化トナカイ（tame reindeer）に対する態度は、ヌエル族の牛に対する態度を鏡で見るようなもの」（Ingold 1980: 101）と評価されたほどである。このタイプの研究においては家畜トナカイの語彙や分類に関する資料は数多く提示され、その中には個体名の存在まで記述したのものもあるが、おおむねデータの提示というレベルに終始してきた（Гурвич 1960: 70; 1977: 43; Попов 1935: 202-203; Попова 1981: 93; Василевич 1967: 72; Vainstein 1980: 123; Whitaker 1981: 344）。そこでア・プリオリに考えられていたのは、飼育する役畜の少なさ故に、群の輪郭は家畜個体に向けた識別をもとに維持されるというものであった。

このように生産様式の観点から二つに分類されたトナカイ飼育であるが、18世紀後半にチュクチ、コリヤーク、ネネツ社会に出現したトナカイ生産経済は、その周辺の諸民族社会にも影響を及ぼしていた。例えばトナカイ生産経済を生み出した東と西の間に位置し、ツンドラという同じ環境条件にあるドルガン、ヌガナサン、北方ヤークトといった間に、19世紀から20世紀初頭にかけて浸透した（Khazanov 1983: 113）。しかしながらa) ツンドラ大規模飼育がb) タイガの小規模型に対してどのような影響を与えたのかについてはほとんど論じられてこなかったのである。

むしろタイガにおける小規模飼育で狩猟が主生業の諸社会においては、タイガや山岳地帯という生態環境における食糧資源の豊富さのために、大規模飼育が保証する家畜トナカイの肉に依存する必要はない。さらにタイガ＝カラマツ等の針葉樹林が生い茂る環境の物理的制約によって、大規模な群は飼えない (Hajdu 1963: 11) と考えられてきたのだ。

しかしタイガといっても南は北部モンゴルやアルタイ山脈付近・中国東北部から北はツンドラとタイガの境界までひろがっている。そうした広大な地域の住民すべてに影響を与えたとはいいがたいが、少なくともツンドラとタイガ・山岳地帯の境界やその周辺地域にすむ集団には特にトナカイの飼育数という点で変化が見られた。先の b) タイガの小規模飼育型に分類される社会の一部では、19世紀には大規模なトナカイ飼育が行われるようになっていたのである (Гурвич 1960: 69; Левин и Васильев 1956: 768; Туголуков 1971: 218) ⁵⁾。

例えばタイガや山岳地帯に住むオホーツク地域のエヴェンの場合には先の a) にあたる家畜トナカイの消費を中心とする大規模飼育があったことが報告されている。平均的には500頭から600頭で、多い場合には1000～5000頭を所有したという。実際にタイガといっても一面針葉樹林が連続するわけではなく、その中には部分的にはツンドラが開けるなど、空間的に全く不可能なわけではない。北極海沿岸の見渡す限り開けたツンドラ地帯と異なり、数千頭の群をそのまま飼育することは不可能であったが、彼等は500～1000頭の状態で維持する管理群を、複数に分離させて行動管理していた (Попова 1981: 83-85, 96-98)。群の管理技術としてタイガや山岳地帯であっても大規模飼育は技術的に可能なのである。

2.3. 革命以前のベルホヤンスク地域のエヴェンとヤクート

こうしたことを前提にして、本論文であつかう地域の革命以前の状況を見てみよう。東シベリアのレナ川東岸からインジギルカ川流域に挟まれたベルホヤンスク地域のエヴェンは交通用を主とする小規模のトナカイ飼育を行いながら、狩猟・河川漁労を行う周年型の遊動生活を送っていた。一方ヤクートは牛馬飼育が伝統的な生業として知られているが、この地域も含めた北方ヤクートと呼ばれる人々は19世紀には定住的生活を基本とするものの、小規模のトナカイ飼育を行い、狩猟・漁労に従事するというエヴェンとそれほど変わらない生業活動を行っていた。彼等は基本的には父系的なクランにもとづく別々の数十人からなるコミュニティを形成していた。

17世紀の帝政ロシアの植民地化は毛皮税 (ヤサーク) の徴税から始まるが、この徴

税の単位となったのはそうした父系的なクランであった。当時東シベリアにはヤクート州 (область/oblast') が設置され、その中にベルホヤンスク管区 (округ/okrug) が存在した。本稿でいうベルホヤンスク地域とはこの同名の管区と一部領域が重なっている。ヤクートの場合、数世帯からなる集落 (ял/yal) が複数集まってできる共同体 (наслег/nasleg) が管区の下部行政地区 (улус/ulus) に登録されていた。彼らは当時すでにトヨンと呼ばれる軍事貴族層、平民、奴隷というように階層分離していたこともあり、少なくとも19世紀になると父系的クランは単に理念的なものとして形骸化していたという (Токарев и Гурвич 1956: 291-297)。エヴェンの場合、外婚単位の父系的クランに基づき川筋ごとに展開する放牧地——同時に狩猟・採集用の収益地でもある——が存在した。この中には、世帯毎にトナカイを所有しながらも、家畜群 (行動) 管理は世帯を越え協力しあう最少のコミュニティがあった。これを束ねるクランが行政クランと位置づけられ、それぞれクラン頭 (староста/starosta) がおかれたが、すべてのクランが一律に行政クランとされたわけではなかった (Алексеев 1994a: 11; Гурвич 1966: 150-164; Левин и Васильев 1956: 767)、クランの分裂と統合は行政クランの存在抜きにはありえなくなっていた。

両者の社会経済生活の上で、トナカイ飼育の比重は異なるものの、いずれも b) タイガの小規模飼育に位置づけられている。さらに細かくいうと、b) の中でも「エヴェンキ型」と分類されるものである⁶⁾。しかし19世紀にはベルホヤンスク地域のエヴェン、ヤクート双方の民族の一部には数千頭に至る家畜トナカイを所有する者が現れ、所有の格差は貧富の差を形成し、富者が貧者を牧夫として雇うようになっていた。特にヤクートの大規模所有者は、夏の間エヴェンにその飼育をまかせ、自分は河川漁労に従事するといった関係もあった。ただ逆にヤクートが富者のエヴェンの元で働くということはなかったという。また結婚においてはエヴェンがヤクートの女性を得ることもあった (Алексеев 1994b; Гогорев 1957: 139; Гурвич 1956: 46-50; 1963: 86; 1966: 152; Худяков 1969: 102; Jochelson 1975(1908): 482-9; Серошевский 1896: 142; Токарев, Гогорев и Гурвич 1957: 325-328)。

一部のものが大規模飼育を成し遂げたものの、地域社会全体がいわゆるツンドラ大規模型のようなトナカイ生産経済へと移行したわけではない。あくまでも生業の基本は狩猟・漁労であった。しかし家畜トナカイの大規模飼育者の場合、ふえたトナカイはそれぞれの財産として経済生活を安定させると共に、特に商業的な意味も持っていた。エヴェンの家畜トナカイは東シベリアの他のトナカイ飼育民から体格の良さや馴化の度合いという点で高く評価されたからである。さらにヤクートのトナカイはそれ

以上であった。彼等のなかには家畜を当時の帝政ロシア行政拠点を結ぶ幹線路用の交通手段として販売したり、自ら御者・ガイド・商人になるものもいたという。一方そうした状況は人々の自由意志に基づく選択ではなく、強制的な交通上の賦役であったと指摘する研究者もいる（Алексеев 1994a: 11; Гурвич 1966: 164; Jochelson 1975(1908): 489–96; Slezkine 1994: 102）。

以上論じてきたようにソビエト革命以前に当該地域でも大規模飼育は行われていたのであった。トナカイ生産経済に移行したわけではなく、植民地行政の政治経済状況に巻き込まれる形で大規模飼育は存在していた。牧畜の技術としては達成されていた大規模飼育、それとタイガ小規模飼育の特徴である密接な家畜と人との関係が、ソビエト時代の畜産化を経て、どのように展開されたのかを見ようとするのが、本稿の立場である。

3. 農業集団化からソ連の崩壊へ

3.1. 定住地の設置と農業集団化

1917年の十月革命によって本格的に成立したソビエト政権は次第に当該地域にも影響を及ぼすようになった。そのひとつは基本的には別々であった二つの民族のコミュニティが定住地を共有するようになったことである。1926～7年にかけてソビエト権力はヤナ川の上流域の支流上に現在のバタガイアリタをふくむいくつかの定住地を設置した。これはどちらかの民族の居住地点や集落を基盤につくられたものではなく、ソビエト政権によって定住化を促進するため創られた行政集落（поселок/poselok）であった。1933年の統計によれば、バタガイアリタを中心とする行政地区全体の人口は1700人ほどで、その内エヴェンとヤクートはほぼ半々であった。革命以前からエヴェンはこの地域で政治経済的に優勢であったヤクートの影響を受け、彼等の多くはヤクート語を使える状況であった。ヤクート自治共和国（現サハ共和国）の一地方行政村として設置された定住地とそこで押し進められた社会主義下政策のなかで、地域住民の日常言語はヤクート語となり⁷⁾、ヤクートとエヴェン間の結婚も増え続けていく中で、二つの民族を統合するような社会経済的基盤が形成され、特定の民族によるコミュニティを基盤としないソビエトの地域社会が成立したのである。

1930年代の生産手段の共有化をすすめる農業集団化においてソビエト権力は私的所有の家畜トナカイを没収し、交通手段のトナカイ飼育から肉と毛皮の生産を主とする

畜産業へと変化させた。それに基づき、それまで家族を単位にしてきた家畜飼育は、職業牧夫による飼育班毎の労働活動＝生産牧畜へと変わった（Левин и Васильев 1956: 774）。つまり革命以前、一部の地域住民によってなされていた大規模家畜飼育が、村という地域社会を支える畜産業として再編されたのだった。群管理、肉の屠殺と流通・販売といったトナカイ飼育に関わる労働が、特定の民族を問わずに職業として開かれたものになったことを意味していた⁸⁾。

3.2. レーニントナカイと個人トナカイの出現

大規模な家畜飼育が地域社会の基幹産業として成立したことによって、家畜の所有の意味がそれまでと異なるようになったことは言うまでもない。ソビエト体制は生産手段を集団化することで、地区の経済基盤を支える生産手段である公的な家畜、つまり社会主義的所有概念に該当する家畜トナカイという存在を作り出したのである。

調査地の農業集団化をみていくと、1960年代までのコルホーズ期とそれ以降からソ連崩壊まで続くソフホーズ期に分けることができる。その変遷についてはすでに論じているので詳しくは述べないが（Takakura n.d.）、バタガイアリタの基幹産業的役割を果たしてきたのは「レーニン・コルホーズ」、「レーニン・ソフホーズ」であった。さらにソ連崩壊後その一部は「レーニン農業企業体」に受け継がれたが、この事業体が所有する家畜トナカイもソ連時代同様に、村の基幹産業を支える公的な財産という意味を担っている。タイトルにつけられたレーニン・トナカイとは、コルホーズ、ソフホーズ、現在の事業体によって所有されていたトナカイのことである。以下レーニン・トナカイといちいち記すのは煩雑なので文字どおりの意味である「公トナカイ」と表記して議論を進めたい。

一方、この公トナカイに対して私的所有概念に該当する「個人トナカイ」という所有のあり方もソ連時代を通して存在してきた。一般的に全ソ連農業史というマクロな視点で見た場合、牛馬といった家畜の私的所有が厳しく制限されていたことは知られている（メドヴェージェフ 1995: 286-292）。しかし、そうしたマクロな研究ではほぼ取り上げられない家畜トナカイの場合は事情が異なっていた。

バタガイアリタでは1940年までには、公トナカイは十分増やせず、むしろ個人トナカイの数のほうが伸びていた。その後のコルホーズ、ソフホーズ期になって公トナカイの数が増え、その一方、1961年に始まるレーニンソフホーズ時代から給与の一部として牧夫達にトナカイが支給されるようになった⁹⁾。その結果、個人トナカイの所有状況はソフホーズ時代を通して、牧夫及びその親族関係者の間に集中していくというも

のだった。ソフホーズの公トナカイは飼育班毎に分けられ管理されていたが、個人トナカイはそれぞれの飼育班の管轄する公トナカイの群と混ぜて管理され、独自の飼育群を形成することはできなかった（高倉 1998）。

こうしてみると、ソ連時代から現在に至るまで家畜トナカイの管理を考える上で、公トナカイと個人トナカイが牧民達にとってどのような存在であったのか、理解していく必要がある。公と個人という区別は、単に所有形態の違い以上の意味を持っている。個人トナカイがソビエト体制の中でどう人々によって作り続けられてきたのか、公トナカイとの関係はどのようなものだったのかを考える必要がある。

職業牧夫となった人々は、一部の人を除けば、飼育技術を学校で習うのではなく¹⁰⁾、現場の労働を通して身につけていく。実際に職業として牧夫を選ぶのは幼い内から父やオジといった自分の親族に牧夫がおり、彼等につれられて放牧地に慣れ親しんできたものが多い。肉畜の生産が基本とはいえ、革命以前からの伝統的なトナカイ飼育と全く関係なく、群管理が行われているわけではない。所有関係に公トナカイという新たな存在が出現したものの、群の管理技術はすでに検討したように彼等の内発的な文脈の中で検討すべきものなのだ。そのことを家畜の分類・識別原理を見ることによって考察していきたい。

4. 家畜トナカイの分類の諸相

4.1. 資料について

筆者のフィールドデータは基本的に現在トナカイ飼育に従事している18才から50代の牧夫たちから聞き取ったものである。これはいわゆる伝統的な家畜トナカイの分類について詳しいインフォーマントに出会えなかったこともあるが、現在行われているトナカイ飼育で実際に使われている家畜分類のあり方の理解を念頭において収集したためである。

牧夫たちはエヴェン、ヤクート双方がいるが、そうした牧夫も含めて村の人々は、トナカイ飼育はエヴェンの生業であり、エヴェン語が残っていると主張する。このため当初、筆者は牧民たちにエヴェン語とヤクート語を分けて双方の分類語彙を聞き取りしていたが、すぐにそうした試みが無駄であることを知った。いくつかの語彙に関してはエヴェン語・ヤクート語を並べることができるものの、多くはそうではない。むしろエヴェン語では、ヤクート語では何というか？ と質問することで彼等の方が

混乱してしまうのだった。おそらくこれはすでに論じたように革命以前から、そしてソビエト時代になってからは一層、ヤクート語が人々の日常に入り込んでいることと関係しているであろう。そのこともあり、特定の民族言語の名称を挙げず、彼等が日常使っている語彙を教えて欲しいというかたちで資料を収集した。

以下ではこうしたデータに加えて、ソ連時代の研究によって明らかにされた民族誌資料と比較しながら、分析を進めていく。というのもこうした文献資料によって、農業集団化以前行われていたこの地域の二つの民族のトナカイ飼育における家畜分類・識別原理を明らかにすることは、現在実践されている状況をより深いレベルで理解することに連なると考えるからである。その際、比較する既存の民族誌を筆者の調査した地域に限定すると、資料的に不十分なものになってしまう。そのゆえ先に触れたようにこの二つの民族のトナカイ飼育は共に、系統起源的にはエヴェンキ型に分類されることを前提にし、対象地域を拡大し、ヤクートの場合、ヤクート語の動植物一般語彙についての資料（Угарова 1993）、ベルホヤンスク山脈西麓の北方ヤクートの資料（Гурвич 1977）、エヴェンについてはソビエトの言語学者がエヴェン語一般のトナカイ飼育語彙としてまとめた資料（Дуткин 1990）、ソビエト民族学者によって収集されたカムチャツカ地域のエヴェンの資料（Гурвич 1960）を比較していく。以下4つの文献資料すべてを比較した性・年齢別分類、言語学者のエヴェン語資料と北方ヤクートの資料を参照した体色分類・角分類という順で議論を進める。

4.2. 性・成長段階に基づく分類¹¹⁾

4.2.1. 家畜トナカイに対する性・年齢別名称の特徴

文献に基づくヤクートのトナカイに対する性・年齢別名称から見ていこう。表1-1、1-2を見ればわかるようにヤクート語一般、北方ヤクートでは当然ながら共通の語彙が多い。雄と雌の区別は一歳の哺乳期間が終わる冬を半分越えた時期であるか、2歳になってからか、という違いがあるものの、雄雌の区別がなされる直前の名称が *muoika*, *muoyka* とほとんど同じである。雄についていえば5～6歳まではすべて記述的に言い表されている。6～7歳でつけられた名称がそれ以上の年齢をも表すという点でも共通している。一方、雌については、3ないし4歳までしか記述名称が付与されない。

次に、エヴェンの場合を表1-3、1-4に記した。ヤクートの場合と同様に、指し示す年齢の範疇が異なるものの共通する語彙は多い。雄雌の区別は、2～3歳でなされる。表1-3では生まれた直後から区別されるようになっているが、この雄雌の区別は子ト

表1 家畜トナカイの性・年齢別類別名称

Year	male	female
1	tugut	
New born calf	suongaa	
calf until 1 st winter	taraggaj	
calf after half winter	muojkaa	
2	khroj abylakhan	kychytar kyuchcha sacharyy
3	ükteene ikteene iiteen üönes	tyhy
4	n'oggurgana n'amarggana	
5	amarkhana	
over 6	buur	

表1-1 ヤクート語一般名称 (Урапова 1993: 83-84)

Year	male	female
1	tugut	
New born calf	suonakh	
Prematurely calf	ymaga	
Delayedly calf	orooti	
2	muojka	
3	abylakhan	suochaaryy
4	iteene	tyhy
5	n'yamarkhana	
6	amarkhana	
over 7	buucheerii	

表1-2 北方ヤクート名称 (Гурвич 1977: 48)

Year	male	female
calf until 6 months	nyari eenken	nyami eenken
calf after 6 months		eeni
2	yavkan mulkan	gulke ömnerichen
3	iiten	nyamichan
4	nörkan	
5	amarkan	
6	dyupti dyuptisan	
7	gyavri dyuptari	
8	ilavri dyuptari	
9	digevri dyuptari	
10	tungavri dyuptari	
11	nyungevri dyuptari	

表1-3 エヴェン語一般名称 (Дуткин 1990: 8)

Year	male	female
New born calf	ongachan	
calf born in Autumn	enken	
2	yavkan	
3	mulkan	gulke
4	iten	nyami
5	nerkan	
6	amarkan	
7	dyupty	
8	gyavri	
9	ilivri	

表1-4 カムチャッカ・エヴェン名称 (Гурвич 1960: 70)

Year	male	female
1	tugut	
2	mojka	satty
3	iteen	tyhy
4	nguorkhang	
5	amarkhang	
6	buur	

表1-5 調査地の一般名称

Year	male	female
1	tugut	
2 months	samets tugut	samki tugut
2	abalkan	
3	tret'yak	
over 4	buur (去勢)	khor (種雄)
		vazhenka

表1-6 調査地の公トナカイ用名称

Year	male	female
1	tugut	
2	mojka	
over 3	buur (去勢)	atyrr (種雄)
		vazhenka

表1-7 調査地の日常的名称

ナカイを意味する *eenken* に雄を示す *nyari*, 雌を示す *nyami* が類別されているだけで、2歳になってから事実上区別されるようになる。双方に共通する *yavkan* という語がある。これはエヴェン語の *yavta* つまり牧草を歯ませる、育てるという意味から派生したと考えられる。*yavkan* は表1-3の場合2歳雄、表1-4の場合性別不問の2歳トナカイを示してはいるが生まれてから1年経ち授乳を終えた時期を境に雄雌の区別がされ始めると考えられよう。雄として分類されるようになると、2～6歳までは記述的に名称が与えられる。表1-3で6歳雄、表1-4で7歳雄を示す *dyupti*, *dyuptisan*, *dyupty* は、エヴェン語で成獣の野生の雄トナカイを示す *dyuptisa* から派生したと思われる。それ以降双方、*gyravri*, *ilavri* と続くが、それぞれ2年、3年という意味で、成獣雄になってから2年目、3年目という意味になる。これは雄が成獣となると記述的ではなく、類別的に認識されうることを示している。一方、雌の場合2歳雌から区別され、3歳以降は年齢が数えられない。

こうして二つを比べると基本的にエヴェンとヤクートの年齢性別名称は語彙の点で異なっているものの、性を類別する構造はほぼ同じものであることが分かる。雄雌の区別は2～3歳になってから表され、雄の場合5～6歳までは記述的に表現されるが、それ以降は単に成獣として年齢が数えられなくなるか、類別的になるというものだ。一方雌の場合は3～4歳を過ぎるとすべて雌獣として年齢が数えられなくなるというものである。

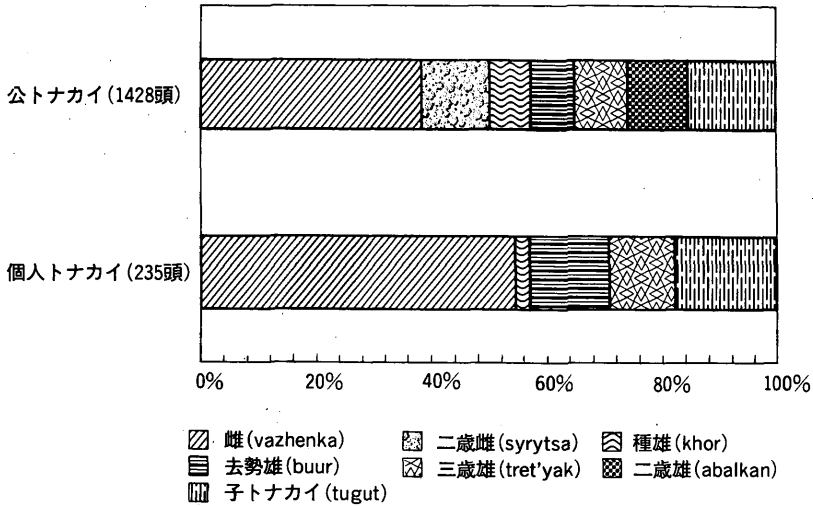
表1-5, 1-6, 1-7は筆者のフィールドデータである。1-5は性・年齢類別名称をあえてインフォーマントから聞いたもの、1-6は、牧夫たちが公トナカイ管理の際に作成する報告書で使われているものである。最後の1-7は個人トナカイ管理をはじめとして日常的に牧夫たちによって使われている分類である。1-5から1-7へと単純になっているが、このように牧夫達は場面によって性・年齢類別名称を使い分けているのであった。個々の語彙に関しては、文献上のエヴェンよりも文献上のヤクートに近いこともはっきりとわかる。特にその傾向は1-5で強い。さらに、*tret'yak*, *vazhenka*, *khor* といったロシア語起源と思われるものが使われているほか、*atyyr* (ヤクート語で種雄の馬のこと) といった言い方もされている。一方、性・年齢類別の構造は上の文献上のデータと同じようになっている。つまり新生仔は性が区別されず、2歳から性別が類別されること。そして雄の場合が長く年齢を数えられるのに対し、雌の場合2～3歳以降になると、年齢の類別は求められなくなることだ。そうした典型が表1-7であるといえよう。以下では、文献データと調査のデータで共通する雄と雌の類別の不均衡性について、実際の群れ管理の状況をふまえながら分析を試みたい。

4.2.2. 雄は成長すると去勢雄となる？

雄トナカイに対する去勢は2歳時つまり十分成熟していない内におこなわれる。この対象となる雄のことを現地の人々は *mojka* と呼ぶ。表1-7の用法に従い「この *mojka* を去勢し、去勢雄 *buur* になる」と人々は語る。つまり2歳時に去勢をおこなうのである。興味深いのは、表1-1, 1-2で6~7歳以上の雄を意味する *buur*, *buucheerii* そして筆者の調査データである表1-5の資料で6歳以上の雄一般を指す *buur* は、ヤクート語では去勢雄一般をあわらす名称であることである。雄の年齢を数えていくと、6~7歳という十分に成長した年齢において去勢雄が現れるということになる。去勢は種雄に選別される以外のすべての雄が当然受けるものであって、成獣雄=去勢雄ということになっている。しかし表1-7に見られるように牧夫達は、去勢後の雄はすべて *buur* と認識しており、あえて年齢を指し示すときには表1-5の用法、例えば4歳の *buur* を指し示すときには *nguorkhang* の *buur* というのである。こうした用法をみていると、去勢することによって去勢雄と種雄の範疇が成立し、その後の雄トナカイに対する年齢把握は去勢雄を対象とし、種雄はその対象から外されていると思われるのである。

こうした類別がなぜおこなわれるのか、牧夫達は自らの説明原理を持っていない。筆者がフィールドワークで知りえた家畜群の構成や群介入行動から判断して以下の二点はその理由と関わってくるよう思われる。第一に家畜トナカイの群の中では種雄よりも去勢雄の方が圧倒的に多いことである。表2は1995年10月に記録されたある飼育班の群において、公トナカイと個人トナカイごとにどのような性・年齢別から構成されているのかを示したグラフである。公トナカイの場合、去勢雄と種雄はおよそ1:1である。この飼育班の1995年6月の報告 (Archive #2) を見ると、6月のはじめの種雄は97頭であり、去勢雄 (*buur*) は47頭であった。これは昨年の秋に去勢雄を屠殺したからで、6月の終わりにはそれまで3歳雄 (*tret'yak*) に分類されていた69頭から10頭が種雄へ、59頭が去勢雄となり、合計107頭の種雄と119頭の去勢雄となり、この1:1の割合で10月まで続いたのだった。現在、事業体に存在する6つの飼育班ではほぼ半分がこのような1:1の割合で、残りの半分は去勢雄の方がほぼ種雄の倍に達するという構成になっている。ただ、そうした違いにも関わらず、3歳雄から種雄と去勢雄を選別する割合は、今あげた事例のように15~20パーセントが種雄と選別されており、のこりは去勢されるという傾向で共通している (Archive #2)。屠殺が絡むため、現存する群れの構成から単純に去勢雄が圧倒的に多いとは言えないが、選

表2 第4トナカイ飼育班の家畜群の年・性別構成 (Archive #2-3)



別の時点では8割以上が去勢の対象なのである。さらに個人トナカイに関しては、表2に見られるように種雄が割合はぐんと減っており、他の飼育班の群れで飼育されている個人トナカイにおいては数パーセントという割合も見られるほどだった。個人トナカイの場合は、雄はそのほとんどが去勢される。雄の多くが去勢雄として生育することを考えると、成熟した雄の記述名称の最後に去勢雄が現れてくるのは当然といえるかもしれない。

第二に *mojka* の時点で去勢されずに、種雄として選別されると、牧夫がその個体に対して後述する去勢雄に施すような特別な調教といった牧夫による介入を行うことはない。放牧群の中で自由に育てられ、生殖行為に励む。去勢雄の場合、成熟した4~5歳の時点で、一部が交通用の役畜として訓練され、残りの大部分は屠殺の対象となる。つまり去勢雄に対しては十分に成長したのかを見計らい、いつ調教を行うか、いつ屠殺を行うかという意味で細かな年齢の把握が求められている。そうした牧夫と去勢雄との関わりもまた、雄が成長すると去勢雄になるという類別原理の背景になっているように思われるのである。

4.2.3. 出産年齢と雌

次に雌の場合をみてみたい。表1-5, 1-6の雌の名称 *satty*, *syritsi* はいずれも未経産の雌のことを指している。そして3歳以降の *tyhy*, *vazhenka* は経産雌のことを意味す

る。文献上の資料でも、雌の場合2～3歳で雌としての範疇がつくられ、その以降は年齢の類別は名称として言及されないことはすでに述べた。雌の年齢別名称が3歳以上でなくなるのは、出産の有無と関係しているのではないだろうか。通常生まれてから半年ほどしか立っていない1歳の秋に交尾はしない。家畜トナカイの場合、雌は2歳から交尾を受け入れ、次の年の春には出産するといわれている。2歳の段階で初めての妊娠をするかどうか、牧夫の関心となり、実際に出産すれば、雌は十分成長したと考えられ、それ以降の成長は牧夫にとってそれほど重要な問題ではないように思われる¹²⁾。ちなみに雌に対する屠殺は出産を終えた3歳以上の *tyhy* が対象になっている。

性・年齢別の分類は牧夫の飼育群の生殖管理面つまり去勢するかしないか、雌の場合は出産といった側面と関わっている。屠殺については去勢雄と経産が主な対象となっている。去勢雄の場合、後に詳述するが、群れの行動管理に必要な騎乗や牽引といった交通用への調教がおこなわれ、去勢後の年齢把握が、経産雌以上に求められている。逆に言えば、雄雌それぞれが牧夫の利用に適する一定成長段階に達すると、それ以上の年齢の個体を分類範疇化する必要がなくなってしまう。雄と雌とで年齢分類の不均衡が生じるのは、牧夫が家畜をどう利用するかという関係性によって規定されているように思われるのである。

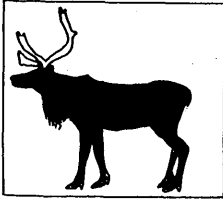
4.3. トナカイの体色分類

トナカイの体色分類については、表3と図1を参照しながら議論を進めたい。なお図1は表3に記した調査地での資料を図に示したものである。文献による資料と調査地の資料に共通しているのは、全身の体色を指し示す範疇と体の一部に注目した表現の二通りが存在することである。特にエヴェン語一般名称の場合、表3に記した黒・白といた全身の体色を示す語彙の中にさらにこまかな分類範疇が存在するが、紙面の都合上記さなかった。このエヴェン語資料に関しては、他の動物の体色との類似性をはじめとして、体の各部分に関する豊富な語彙の存在を知ることができる。語彙をくらべてみると、全身の体色をあらわす *khara* (黒)、*manga/magan* (白)、*borong/boron* (灰色) といった語彙は筆者の資料と北方ヤクート資料で共通している。その一方、部分的な体色を示す語彙の場合、表記と意味が若干ずれてはいるが、エヴェン一般名称との類似性も見られる。*khudere* 鼻に白い斑と *sudele* 白い鼻筋、*kokchilaan* 白い蹄と *kupchulan* 足首白などである。

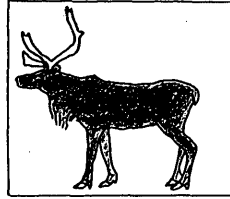
筆者の調査で知りえたのはトナカイの体色全体を示す語彙として黒、薄黒、灰色、

表3 トナカイ体色分類名称

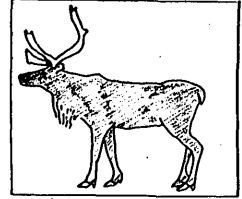
北方ヤクート名称 (Гурвич 1977: 48)		
全身	khara	黒
	magnan	白
	borong	褐色
	cheelkee	灰色
	kuohoj	明褐色
	sahyl	森のような赤茶色
	saharcha	
	choggur	ぶち
	meketeleekh	斑点
	khara chuoggur	黒のぶち
足・脚部	elemes	足首白
	becheettekh	後脚に白い斑点
	champaraak	
顔	bugdin	鼻筋まだら
	chakyr	赤目
	urung	下半身白, 首白
エヴェン語一般名称 (Дуткин 1990: 17-21)		
全身	gavaangan	黒
	gavaandya	
	giltaalra	白
	karav	灰色
	buudi	ぶち
額	khulgara	二本の角の付け根の間に白縦縞
	dyumngeti	額と角の間に白の縦縞
	toosalaan	額に星形
	tosalanga	白い額
顎	kevepu	下顎の端にぶち
	anchapu	白い頬
鼻筋	koltachi	鼻筋の半分が黒, 半分は白
	angapu	白い鼻筋
	ongapu	
	khudepu	鼻筋に白のぶち
	khudere	
目	onyavar	目の回りが白
首	mukala	白い首
	ölkere	白首で黒のぶち
腹・腰	ölgileen	白い腰
背中	namdalan	ぶちの背中
足・脚部	kokchilaan	白い蹄
	ömerde	ぶちの脚
	ömerdekeen	一本脚が白
	unapachan	前脚が白
	un'kapu	後脚が白
	telgile	白い斑点の脚
	uuta	オオカミ
他動物との類似	chriven	ユキウサギ
	naagalaan	褐色で斑点のアザラシ
調査地の資料		
全身	khara	黒
	kubagaj	暗灰色
	boron	灰色
	magan	白
	ymasky magan	真っ白
	elemes	ぶち
	buruna	斑点
首	kyylmas	首白
足・脚部	kupchulan	足首白
鼻筋	sudele	鼻筋白
その他	to hakhta	足首と首が白
上半身	kylmakh	全体は灰色で側面に白い細毛
下半身	belovata	下半身白



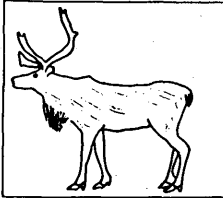
khara



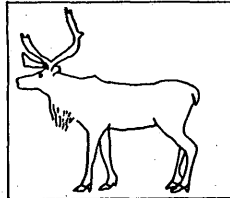
kubagaj



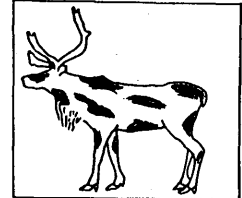
boron



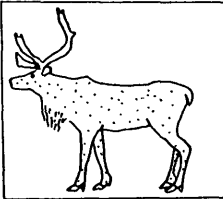
magan



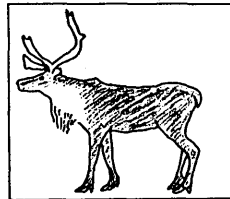
ymasky-magan



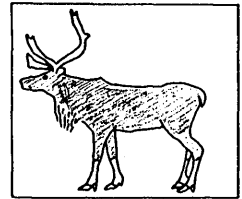
elemes



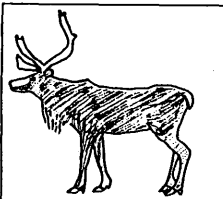
buruna



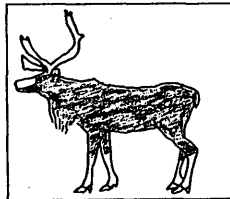
kyylmas



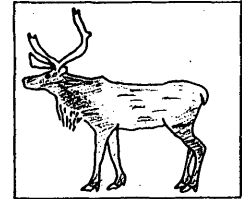
kupchlan



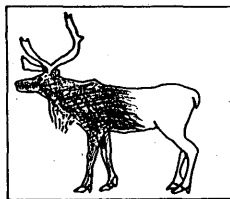
sudele



to-hakhta



kylmakh



belovata

図1 家畜トナカイの体色分類名称

白の4色が基本になっていることである。この色は複数のインフォーマントからの聞き取りで共通している色であった。実際にトナカイの色調というのは褐色と白の間のグラデーションにあるわけだが、色への言及ということになると、文献データに示されているような褐色という色素を表す語彙として聞くことはなかった。

こうした基本四色を表す語彙や斑があるかどうかについては蹄から頭までトナカイの体全体の色調から判断される。一方部分色調の場合は、文献報告により詳しく見られるように、主に顔周辺を中心にして様々な名称があることがわかる。特に顔といっても、その中の顎や鼻筋、目、首といったより小さな部分毎に名称が存在している。こうした体の一部の色調は、資料を見る限り、その部分が白であるかあるいは斑であるかどうか判断の基準となる。逆に対象となった体の一部の色以外はどのような色であろうとかまわない。例えば鼻筋が白をあらわす *sudele* の場合、そう判断されるのはその部分の色が白であるということであって、全身は黒、灰色なのかは問わない。このような体色分類が現実と言及されるのは、毎日の放牧作業でおこなわれる投げ縄による家畜の捕獲作業の時だった。捕まえられるのは、その当日に必要な交通トナカイで、牧夫が捕獲しようとした特定の個体を、それを知らない別な牧夫に対して説明するときに「その *elemes uchakh* (まだらの騎乗用トナカイ)」というような形で言及され、指し示される。あるいは囲いの中での選別作業（屠殺など）や頭数数え作業の時に、「その *boron* (灰色)」などと指し示される。多数の家畜が存在し、ある牧夫が特定個体の捕獲を意図し、それを他の牧夫に対して伝えるときに頻繁に用いられていた¹³⁾。

4.4. 角の分類と角の加工

表4は角の分類とその名称である。このデータも他と同様に、フィールドデータよりも文献の方が詳しい。双方の文献の資料からは角の形態的な特徴をしめす語彙が存在をうかがうことができる。エヴェン資料の *chukur* 鍵型に曲がった角、*choluk* 一本切り落とされた角、北方ヤクートの *d'aakhaa* 枝の多い角といった具合である。筆者がフィールドで聞いた牧民たちからは、形態の特徴を示す語彙は得られなかったが、角の部分名称をえることができた¹⁴⁾。

牧民たちにとって角の形はトナカイの個体識別を行う上で重要な指標になっている。それぞれの角の形が、そのトナカイと結びつけて記憶されるからである。そのため角の部分の名称がついていると彼等は主張する。事実、その主張をうらづけるような行動があった。それは騎乗トナカイや橇の牽引トナカイの内でも先導の役割を果

表4 トナカイ角分類名称

北方ヤクート名称 (Гурвич 1977: 49)		
特徴のある角の名称	n'ylaggar	強く後ろに反れた角
	chongkugur	鋭く前に突き出した角
	n'alboaggar	幅広い角
	d'aakhaa	枝の多い角
エヴェン語一般名称 (Дуткин 1990: 24-6)		
角の総称	tangnya	
幹部分	khirgitla	未分化の角
	chkur	鍵型に曲がった角
	choluk	一本切り落とされた角
	kurbuti	付け根から切り落とされた角
	degenken	左側の角を落とされた角
	malngachaan	角がない状態
	mukenken	長い部分なしの角
枝部分	gabuli	枝角
	taangnyagda	大きい枝角
他のものとの類似性	nermite	木の枝のような角
	kevere	顎のような角
	muudeken	切り株に似た角
調査地のデータ		
総称	muos	
	panti	袋角 (硬化していない角)
幹部分	nyana	前方中心角
	sarapchi	前方左右角
	toyonmous	二本の後方角
枝部分	eiepin	toyonmous の後方につく角

たす個体を中心にし、その特定の部分角を切断することである。牧夫たちによれば騎乗する際のプラクティカルな側面、つまり背中側に向かって生えている角は騎乗する牧夫の目などに刺さる可能性があり、そのためそうした部分を切り取る必要があるという。しかし実際に騎乗用トナカイを見ていると、前方に突き出している角 nyana が切断されていたり、逆に前方に生えている nyana 及び sarapuchi 以外の枝角がすべ

て切り落とされていたり。あるいは左右どちらかの長い角 *toyonmous* の片方のしか残さずに切断してしまっているなど、牧夫の説明だけでは理解できない切断は多々見られる。

このことは後の議論と絡んでくることであるが、牧夫は自分が使用する騎乗用トナカイ及び牽引用の先導トナカイに対しては、完全に個体識別を行っている。そのため、思い思いに角の一部を切断し、全体の形態を加工することで、より識別しやすくしているのではないかと考えられるのである。多数の群の中に混じっている中から、騎乗用トナカイを見分けるときに、角の形に特徴があると遠くからでも見分けやすい。騎乗用トナカイは特定の使用主が決められており、原則的にはその人以外によって使われることはない。特定の騎乗用トナカイを使用する牧夫が、切断の必要性を感じた時に任意によって角の部分切断はおこなわれる。おそらく文献のエヴェン・ヤクト資料でみられた形態の特徴を示す語彙は、そうしたために存在していたのでないだろうか¹⁵⁾。

トナカイの角と牧夫の関わりはもう一つある。それは特定の季節に行われ、しかも切断の対象が主に種オスにむけて行われるものである。トナカイは雄も雌も角を持っている。日本鹿の角が毎年生え変わるように、一年をサイクルとして角が自然におちる。ただ、雄と雌で生え代わりの季節が異なっている。雌は通常出産後の春の時期に対し、種雄は秋の交尾期を終えてからである。そして去勢雄は種雄よりも一般的に遅い。夏になると、雄トナカイの角は柔らかい袋角の状態から、皮が剥け、枯角の状態へと変化していく。交尾期にはいると種雄同士は雌をめぐって衝突するが、そのときに互いの角を絡み合わせていわば力比べを行うのである。このときに尖った角がどちらかの腹などに突き刺さって致命傷になることもある。そのため、これを防ぐという理由で、角落としを行っている。角落としは、種雄を中心にするが、去勢雄でもこの時期に骨化している枯角を持つ個体に対しては施される。

先のいわゆる角の加工が、角の中の特定部分を切り取るものだったとすると、この時期には、根本からバツサリと落とされるのが特徴である。同じ角切断とって晩夏に行われるときには生殖管理上必要な作業として、牧夫たちにとって認識されている。この角落としについては家畜トナカイの分類の問題とは直接関係してこない。

4.5. 耳印と個人トナカイ

最後に耳印を取り上げたい。基本的に耳印は、所有関係を表すものであって、トナカイの分類・認識に直接的に関わってくるわけでない¹⁶⁾。しかし、現在のトナカイ飼

育において公トナカイであるのか、個人トナカイであるのかという区別は、家畜の分類・認識の問題と密接に関わっている。その点に関して当該地域のトナカイ飼育民たちがつかっている耳印に関する一般的な知識を紹介する。

耳印は大きくいって個人トナカイを表すものと公トナカイを示す二つに分けることができる。本稿では具体的形態については示さないが、個人トナカイの耳印と比べると公トナカイの耳印は非常に単純な形をしている。

耳印刻みは、生まれて数カ月後には実施される。普通、個人トナカイの耳印は6月中旬に行われる。この時期に仔トナカイは母親の後ろをついて行動している。そのため、最初に母トナカイが誰の所有であるかを、みきわめた上で、仔トナカイを捕獲し、耳印を刻む。この作業が終わると、7月の初旬には耳印の刻まれていない仔トナカイすべてに飼育班の公トナカイのマークが刻まれる。

牧夫たちは自分の所属する公トナカイの耳印は絶対に知らなければならない。また放牧地が隣接する飼育班の耳印についても通常知っている。ただそれ以上になると、勤労年数等によって個人差がでてくる。一方個人トナカイの耳印については、世帯単位で刻まれており、他の世帯の印は必ずしも知っている必要はない。ただ実際毎日の作業の中で例えば特定の騎乗用トナカイを使っているために、同じ飼育班の牧夫の耳印については相互に知っているのが普通である。しかしそれらを記録としてまとめた耳印台帳のようなものは存在していない。また切り込みの方法についての言及についても、特に定まった言い回しなどはなかった。牧夫たちは耳印を自らの頭でおぼえるしかない¹⁷⁾。

個人トナカイを持っている世帯の場合、その中の男性・女性いずれの子どもにしても結婚し、独立世帯を営むときに、両親から個人トナカイが分け与えられる。この時点で初めて独立する子どもにトナカイが与えられるわけではない。毎年新しいトナカイが生まれていく中で、世帯を同じくする子ども達へ分与されていく。こうした世帯内部での個人トナカイの分与は、主に雌トナカイを中心として行われる。雄の場合、その中で調教された騎乗トナカイが対象となる。しかし、その分与は世帯の構成員が放牧キャンプで暮らすかどうかが基準となる。というのは村で暮らす場合、そうした移動用のトナカイが必要にならないためである。職業牧夫の家族の多くは村で暮らしている。世帯主である父や兄が牧夫として放牧地で働いていても、母や娘達は村にすることがほとんどである。子どもが独立するときには、あらかじめ配分されていた個人トナカイが、新しい世帯の所有する個人トナカイとなる。そしてそれまでの耳印に新たな刻みが付け加えられるのである。

4.6. 家畜トナカイ分類原理の特質

以上様々な家畜トナカイの分類原理について記述してきた。文献上のエヴェン、ヤクート、そして筆者の調査資料と三つを比較してきたわけだが、語彙的に見てみると、現在の牧夫たちが使っているのは、文献上のヤクートのものと共通するものが多かった。だからといって安易にこの地域の革命以前のエヴェンがヤクート系のトナカイ飼育語彙を使っていたと判断することはできない。すでに革命以前からエヴェンの間ではヤクート語が浸透していたとはいえ、単純に論理の問題としてもヤクート語起源のエヴェン語やエヴェン語起源のヤクート語という存在も想定できるし、実際に聞き取りの過程で、牧夫たちは「エヴェン系ヤクート語」とか「ヤクート系エヴェン語」さらに「ロシア系ヤクート語」等という説明をすることが多々あったからだ。重要なのは、言語学やソビエト民族学が前提にしていたいわば「本質主義的」な意味での言語・民族の区分では収まりきれない状況が展開していることである。主にヤクートとエヴェンからなる現地の住民はその状況に対して「トナカイ飼育語彙はエヴェン語」と自ら規定しているのである。

第二に文献で得られた資料はいずれも詳細な分類原理が家畜の上に交差し、これに対し調査地の資料はそれと比べると貧弱にすら見えてしまうことである。文献で見られた詳細な語彙の存在はソビエト民族学で指摘されたタイガ型小規模飼育に見られる家畜と人との密接な関係性をうかがわせるものである。その一方、現在、畜産の大規模飼育を実践しているフィールドデータから考えられるのは、大規模飼育を行う上でそれほど細かい分類は必要ないのだろうかという疑問である。筆者の資料においては複数の分類レベルが存在していたが、それらの中でも最も単純な様式が、現実につかわれている。例えば知識として残っている性・年齢別類別名称（表1-5）はより文献に近く、現実の群管理ではそれらをベースにしていることはわかるものの、より簡単な形（表1-7）で使われている。ソビエト体制下で確立された畜産業で求められる単純化した分類とそれ以前のタイガ型小規模飼育下のエヴェンキ型的な分類の折衷、この辺りが現状に関する妥当な解釈といえるだろう。

第三に文献・調査地の資料から共通していえるのは彼等の分類原理というものが、特定の個体を浮き上がらせるような特質を持っていることである。騎乗など交通用トナカイ等の去勢雄に対するものが中心的で、それ以外の種雄や屠殺する肉用のトナカイにはあまり当てはめられない。性・年齢別類別名称にしても、その類別の基本にあるのは、単なる性差と年齢差という原理ではなく、むしろ、人の利用という側面から

みた性差であり、年齢であった。また角の分類を見ても、原理としてはすべての家畜トナカイに適応することができる指標ではあるが、それが実際に用いられるのは、騎乗用トナカイの角の加工に見られるように、人によって利用されるという前提がある（体色分類については以下でさらに論じる）。分類指標は基本的にすべての家畜トナカイに適応できる性質を持っているが、それを適用するのは牧民と関わりの深い家畜トナカイが中心であって、それ以外の個体には必要とされないということになる。牧夫の飼育するトナカイの群の中には、人との結びつきが緩やかで、あるいはそうした結びつき自体を必要とされないような個体群が多く含まれている。タイガ型小規模飼育の特徴である人と家畜の密接な関係性は、騎乗といった直接的に利用するという点で牧夫に近い家畜に対して見られるのであり、畜産の基本となる肉畜などに対しては密接な関係性は必要とされていないのである。

5. トナカイの個体識別

5.1. 調教されたトナカイ

これまでの議論で、家畜トナカイのなかには、人との関わりが少ない個体群と逆に多い、例えば交通用として使役されるトナカイの存在があり、牧夫のトナカイへの分類・認識は主にそうした個体群に対して向けられていることを記述してきた。一つの飼育班の管理対象が多い場合2000頭ほどになる群の中で、どのようにそうした分類＝選別がされているのだろうか？ このことを筆者が滞在し直接観察してきたある飼育班の状況を提示しながら考えていきたい。

まず記しておかなければならないのは牧夫たちの間では野生トナカイ *kyyl taba* と家畜トナカイ *d'ie taba* の二つが区別されていることである。この内家畜トナカイ *d'ie taba* は牧夫自身がロシア語でダマシニェアレニィと訳すように、野生種に対する概念として「家畜種」という意味である。その一方、家畜トナカイ *d'ie taba* はこれまで述べてきた騎乗用や駄載用などの役畜トナカイなどだけを指す狭義の意味でも用いられている。以下では、こうした狭い意味でのいわゆる使役トナカイ等を指して「家トナカイ」と呼んで議論をすすめることにする。

牧夫たちが管理する家畜トナカイの群の中で、家トナカイであるかそうでないかを区別するのは、その個体に対して「調教」を施したかどうかである。調教を施すのは、単に交通用トナカイとなる去勢雄だけではない。現在あまり見られないが不経産の雌

トナカイも轡牽引用に訓練されることもあり、これも含まれる (ketem と呼ばれる)。さらに雌トナカイの中でも搾乳の対象となる個体に対しては、搾乳をその雌が許容するという意味での調教が必要である。去勢雄と雌に対する調教のあり方自体は異なるが、家畜トナカイの中で調教を施された個体は samngaggas と呼ばれる。家トナカイとは去勢雄および雌の中での samngaggas=調教済み個体のことなのである。これに対して、未調教の個体は khanggyl と区別されている。これは種雄をはじめ、去勢雄・雌の中で調教されていない個体を意味している。牧夫たちにとって家畜トナカイの中で実際に利用する個体の選別が調教の有無によって判断されているわけである。

5.2. 人と家畜関係における調教の意義

5.2.1. 調教によってつくられる交通用トナカイ

調教というものがどのように行われ、その結果としてどのような人と家畜の関係が形成されるかを見ていきたい。雄の場合、去勢雄が調教の対象となる。若雄の中で体や角が大きく、しかも顔が強そうな個体が種雄に選ばれる以外は、すべて雄は去勢される。通常エヴェンキ型の去勢の方法は睾丸を歯で噛み潰す方法が知られている。しかし筆者の調査地ではナイフで陰嚢をさいて、睾丸を取り出す方法がとられていた¹⁸⁾。去勢雄のうち、毎年3～4歳に成長した内の何頭かに調教が施される。筆者が滞在した飼育班の場合、通常個人トナカイの場合は、一年に3～4頭ほどが対象になった。一方公トナカイに対しては最低3頭、多ければ10頭ほどが対象になる。おおよそ、初夏の5～6月から調教は始まり、一夏をかけて、断続的に続けられる¹⁹⁾。

調教の基本は人がトナカイを利用することをその個体に馴れさせ、家畜側の抵抗をあきらめさせることにある。通常、朝方に放牧地から寄せ集められた群の中から、調教を施す個体を捕獲し、その個体を人の宿営地の近くに繋ぎ止めることから始まる。寄せ集められた群のほとんどは宿営地付近で自由に休んだり喫食しながら、夕方には再び放牧地へと去っていく。ところが対象となった個体は日中、家畜は宿営地の柳の木などに結びつけられ、行動を束縛される。このようにして牧夫及び宿営地そのものに家畜がなれていくことが第一段階である。

次いでその用途に応じた訓練が施される。牽引・駄載の調教は実践を通して積み重ねられていく。一般的にいて牽引、駄載の調教は、騎乗と比べると、それほど困難ではない。特に牽引は他の牽引個体に混じってつなぐれ、さらに他の個体が轡を引っ張るため、最初は嫌々ながらも轡の動きについていかざるをえない。そのためそれほど大きな抵抗は示すことはない。抵抗する場合は轡の後ろに結びつけ、轡に引っ張

られる状態を繰り返して、慣れさせていく。この牽引訓練が終わった個体に対して駄載・騎乗訓練が行われる。駄載訓練も実際に荷物を載せた状態で移動することを繰り返していく。両脇腹にまたがる形で付けられるトナカイ用の荷袋は *eremedej* というが、これを付けた駄載個体を *yndi* という。橇の場合、雪のある時期に用いる乗用橇 (*olokh syarga*) にしても通年で使う荷用橇 (*kötöl syarga*) にしても、牽引するトナカイは2頭で、彼らを進行方向に対して並列に組むのが基本である。このうち進行方向に対して右側の個体が *nguogghut* と呼ばれる先導個体になる。この個体は手綱と鞭代わりの長い棒を通して発せられる人の命令をよく聞く個体を選ばれる。これに対して左側は *khos* という補助個体である。ちなみに先導個体に対する調教だけは冬に乗用橇を使いながら行すが、すでに選別される段階で人に従順な個体を選ばれるのでそれ程抵抗なく調教されるという。

これら二つが移動の実践の中で訓練を行うのに対し、騎乗はより念入りである。通常一人がトナカイにまたがり、もう一人が家畜の首に巻き付けた手綱を短く引きつけた状態でゆっくりと歩かせることから始まる。駄載まで許容していたトナカイも人が自分の背に乗るのに対しては最初はかなり抵抗を示し、暴れることが多い。騎乗の場合、先の二つと異なり、人が直接その個体に触れること、そして移動の自由そのものも牧夫に支配されてしまうからであろう。牽引の場合集団で動いているため、ある個体が休みたくなってもその自由は許されないが、しかし歩行ないし走行のペースは基本的に自分たちで定めることができる。駄載の訓練の場合、自らが歩行・走行のペースを決定することは牽引と同じだが、更に休止や喫食行動も比較的自由になりやすい。たとえすでに十分訓練がなされていても、その個体が休みたければ座り込んでしまうし、水が飲みたければ立ち止まって飲む。

ところが騎乗トナカイの場合に休止・歩行・走行のペースからわずかな方向転換まで常に牧夫が指示を出し続ける。トナカイの騎乗に際してはエヴェンキ型に共通な右手には杖をもち、家畜の右側面から左足を肩胛骨の上についた鞍にのぼして跨る。鎧がついていないため、両足は首からはほぼ両顔の辺りにつき、騎乗個体の操縦については両足でトナカイを顔や首、胸をけりながら指示を出す。もちろん手綱からも命令は出すことができるが、効果的なのは足である。騎乗の訓練では暴れる個体に対して徹底的に人の足によって命令が出される。人のかけ声は出されるが、命令として定着している語彙はない。

こうした状況を観察していると、家畜トナカイの調教というのは、その個体が人および人の物質文化に対して、いやがらず、それを受け入れるというのが大きな鍵にな

っているように思われる。その点からすると騎乗の調教はトナカイの抵抗が最も大きい。人を乗せることで、移動・方向転換・停止すべての行動を支配されてしまうからである。とりわけ騎乗の調教の時には、トナカイがあばれて、抵抗することが多いので、そうすると、拳を振り下ろし、罵倒し、とにかくトナカイに対して人の支配下におかれることを強制しているような印象をもった。ただあまりにも抵抗する個体については訓練をあきらめることもある。また騎乗用トナカイの訓練は、ときには牽引や駄載の訓練を抜きにして、直接施されることもある。牧夫たちの説明によれば、騎乗の調教を受け入れれば、櫛の牽引も駄載も可能だからだという。しかし逆は言えない。騎乗用トナカイは去勢雄の中で人の存在およびその支配を最も受けた存在なのである。

5.2.2. 調教個体と人との関係

調教を終えた去勢雄の場合は、人との物理的な接触において、未調教のトナカイとの差異が現れる。その一つは投げ縄で捕獲されると、抵抗せずに人に従うことだ。これが同じ去勢雄であっても、未調教の個体の場合は、投げ縄で捕獲してから、人が実際に投げた縄を手繰るときに、暴れてなんとか捕獲されないようにと試みる。種雄になると、その抵抗はさらに激しい。それと比べると、調教済みの去勢雄は、投げ縄でとらえられるとその場に立ち止まり、人が紐を引っ張ればそれに従順に応じる。全くと言っていいほど抵抗はなく、子どもや女性が首に結びつけられた紐を引っ張ってテントの方へつれていくことさえ可能なのである。この従順さというのは、調教の結果としてでてくるのか、あるいはもともと気質の荒くない個体を選ぶ結果としてでてくるのか明確にはわからない。しかし、抵抗の度合いの大きい去勢雄に対しては、調教自体を放棄することを考えると、後者の方が正しいように思われる²⁰。

より重要なのは、たとえ訓練が終わり、人が利用可能になっても群で集まっている状態から人が直接手でその個体を捕獲することは原則的にできないという点である。調教した去勢雄に対しては未調教個体と比べると、人が接近できる距離は小さくなるが（しかし未調教個体と混じっている状態ではほとんど差異はなくなる）、基本的には投げ縄による捕獲が必要なのである。

これに対し、調教をおこなったメスの場合はかなり様相が異なっている。雌の場合、人が直接手で捕獲することさえ可能なのだ。表2に見られたように、公・個人トナカイ双方で群の半分ないし、それ以上を占める雌トナカイへの調教は、個人トナカイであるか、公トナカイであるかが基準となる。私的所有されている雌トナカイを対象に

調教が施され、公トナカイに対してはされない。

牧民達の説明によると、雌の調教の目的は、人による搾乳を許容させることにある。トナカイの群管理では夜寝るときに家畜が宿営地付近に配置されることはない。夜は放牧地で全く自由にされ、朝宿営地へと追い立てられてくる。搾乳を行う人（だいたいは女性）は、自分の所有する雌トナカイを対象にして、片方の手で塩を雌トナカイに向かって差し出ししながら、「メェメェメェ」というかけ声をかけ、目的の個体に近づいていく。雌トナカイの方もその人に向かって近づいてくるので、それを手で捕まえてしまう。調教の施してある雌トナカイに対しては柳の枝を曲げてつくった首輪 *kyldyy* がつけてあるので、それを手でつかんでしまえば逃げられない。実際に雌トナカイは捕まえられても逃げようともしない²¹⁾。ちなみにこうした際には去勢雄の調教個体も人に近寄ってくる場合があり、さらに素手で捕獲可能な個体もいる。

搾乳自体は初夏から秋にかけて行われる。ただし、捕獲するときの塩を与える作業は冬も含めて一年中おこなうのが原則である。ある女性によれば「冬の妊娠中から塩をやるから、馴れていくんだ」と説明する。毎日、人の手から直接塩を与えられている雌は、それ以外のどんなトナカイと比べても、人の接触に対する許容度は高い。それらの雌に対して、出産を終え仔トナカイが一定の大きさになる6月下旬から7月初旬にかけて、搾乳を始めるのである。特に初めての出産を経験した雌の場合、人が自分の乳にさわるとをいやがり、暴れる個体もでてくる。それに対しては、辛抱強く我慢しながら、人による搾乳を慣れさせていく。

トナカイに対する調教の原理というのは去勢雄の場合には人への服従の度合いが、雌の場合には人との親和性の確立が問題になっている。そうした違いはあるものの人と家畜の間につくられる関係は、家畜側からみて、人との接触を積極的に行うかどうかは別として、それを許容する個体が現れるということである。その点からすると私的所有の雌トナカイ、騎乗用トナカイ、駄載・牽引という順で人の接触への許容度が高い。

5.3. 家トナカイの個体名

5.3.1. 個体識別と調教済み個体への命名

以上述べてきた訓練の過程を通して、家トナカイは牧夫によって完全に個体識別されるようになる。このときに牧夫によって注目されるのが、先に記述したトナカイの分類指標である。トナカイの見分け方で最も大切なのは、顔とくに鼻筋 (*nohama*) の色と角の形、そして肩胛骨の出っ張り具合だという。牧夫の言葉を借りれば、「人

の顔を覚えるようにわかってしまう」という。

個体識別されるトナカイには個体名が名付けられる。しかし今まで述べてきた調教トナカイすべてがその対象となるわけではない。家トナカイ＝調教トナカイのなかでも特に人との関係性が強い個体にのみ名前が付けられるのである。去勢雄の場合、その対象は騎乗用個体 *uchakh* と橇牽引先導個体 *ngogguhut* である。これらの場合、その用途に応じた調教が始まるとそれらはまず *takkana* と呼ばれる。その状態を経て目的の調教をその個体が受け入れるようになると、それぞれは騎乗用個体 *uchakh* と橇牽引先導個体 *ngogguhut* と認識され、その上で個体名が付与されるのだった。雌の場合もこれと類似している。雌の調教の対象は、基本的には個人トナカイが対象となるが、その調教の段階をへて、人による搾乳が可能になった時点で個体名が付けられる。搾乳の調教中は名前が付けられないのだ。調教を経て搾乳可能となった雌は *tyhy* と呼ばれる。この語は表1-5上での3歳以上の雌一般をも表している。*tyhy*とは単に性・年齢類別名称上の一範疇を示す語であると同時に、家トナカイの中でももっとも人と関係性が深い搾乳雌を表す語なのであった。

もう一点注意したいのは、個体名そのものの性質である。彼等がつかう個体名はロシア語由来の「クリーチカ」である。字義どおり訳せば、呼び名とかニックネームである。他の家畜、例えば犬や馬の個体名についても、牧夫達は人間の名前を意味するロシア語「イーミャ」は用いず、「クリーチカ」を使う。犬や馬の場合、文字どおり、クリーチカは、特定の個体にたいして呼びかける時に使われる呼び名であるが、トナカイの場合、その個体名がトナカイに対して呼びかけられることはない。

5.3.2. 個体名の意味

次に具体的な個体名をあげながら、名前の意味について考えていきたい。表5は飼育班で働くA世帯が私的に所有する個人トナカイの内、騎乗個体と搾乳個体につけられた個体名リストである。意味的に整理すると、a) 体の体色・特徴、b) 個体の性質、c) 個体の成長史、d) 人名等が基準になっている。a) の場合がもっとも多い。例えば表に振られた番号5の *Boronkos*、7の *Elemeschan*、14の *Kybagachan* などのように灰色の *balon*、まだら模様を意味する *elemes*、暗灰色を *kubagaj* といった表3の筆者が収集した資料上の体色分類の語彙をもじった個体名が存在している。また6の *Chokchogo* や11の *Kharchana* などのようにライチョウ (*chekchengo*) といった鳥の体色や雪 (*khaar*) の白さやと類似しているという理由からそれらの語彙を変形させて名付けられた個体名もある。先に述べた体色分類の議

表5 A世帯の個人トナカイの個体名

1	Altuschana	第6 (alta) 班の飼育班出身	搾乳雌	
2	Alutus	第6 (alta) 班の飼育班出身	騎乗	
3	Auguschana	8月 (ロシア語の augusta) 生まれ	搾乳雌	
4	Bokshol	暴れることからボクサー	騎乗	公トナカイ
5	Boronkos	体色薄灰色 (boron)	騎乗	二頭が同名
6	Chokchogo	ライチョウ (chekchengo) の体色	騎乗	
7	Elemeschan	体色まだら (elemes)	騎乗	
8	Hiroki (Krottki)	ヒロキが練習した個体	騎乗	
9	Kalida	闘牛のように角を前にして突進する	騎乗	公トナカイ
10	Karatiska	暴れることから空手家	搾乳雌	
11	Kharchana	雪 (khaar) = 白い体色	搾乳雌	
12	Khariyana	エゾ松 (kharyja) に角類似	搾乳雌	
13	Khulebshav	バン (khuleb) 好物	騎乗	
14	Kybahachan	暗灰色 (kubagaj) 体色	搾乳雌	
15	Kueregan	ヒバリ (kueregej) の体色と類似	搾乳雌	
16	Kuokh lenta		搾乳雌	
17	Kurachana	小さい (kyra) 体格	搾乳雌	
18	Kylaman	まつげ (kylaman) 長い	搾乳雌	
19	Kylapachitar		搾乳雌	
20	Kyrumakh	体色上半身白 (kylymakh)	騎乗	公トナカイ
21	Kyrigej	ヒバリ (kueregej) の体色と類似	搾乳雌	
22	Maganchana	体色白 (magan)	搾乳雌	
23	Naskura	蹄が白	騎乗・搾乳雌	二頭が同名
24	Olishka	好きな女性の名前	騎乗	公トナカイ
25	Pavlusha	パーベル (人名) 所有	騎乗・搾乳雌	二頭が同名
26	Sattichana	少女	搾乳雌	
27	Sokkol	タカ (sokol) と体色類似	騎乗	
28	Tulkchana	ユキホオジオ (tuluk) の体色と類似	搾乳雌	
29	Turlaina	母不明仔 (tulajakh = 孤児)	搾乳雌	二頭が同名
30	Ulakhand'a	体格大 (ulakhan)	搾乳雌	
31	Valyuta	袋角が一級品であることからロシア語の通貨・外貨 (valiyuta)	騎乗	

論において、文献の資料では、他の動物との類似性という分類範疇が存在していたが、似たような発想を個体名の付け方から伺うことができよう。同じような例は番号12の Khariyana はエゾ松 (khariyja) のような角という特徴が個体名に反映したものにも見いだせる。また体格の大きさが個体名に反映されている18の kurachana や30の Ulakhand'a もある。b) 個体の性質については番号10の気質の荒いトナカイにつけられた Karatiska=空手家や4の Bokushol=ボクサー等がある。c) の個体の成長史は1の Altusなどで、これは隣接するトナカイ飼育班の公トナカイを報償として得てそれを彼らが調教したものである。また3の Auguschna のように通常の出産より遅い8月に生まれたことが名前の由来となっているもの、さらに筆者が騎乗の練習をしたトナカイ8は、元々の個体名 Kurottoki と筆者の名前が似ているとって Hiroki ヒロキになってしまった。29の Turlaina は母トナカイが不明であることから孤児 (tulajakh)の語が由来となっている。d)の例はそれ程多くないが25の Pavlusha で、これはA世帯の人物 Pavel に所有が割り振られたトナカイという意味である。

一つの世帯で重複した個体名が用いられることもある。備考の欄には「二頭が同名」と書いてある5の Boronkos や23の Naskura 等がそうである。先にも挙げた25の Pavlusha の場合、この名前を持つ搾乳トナカイは同名の騎乗トナカイと母子関係で、そのために同じ名前を付けたということだった。重複した名前の場合、8の例のようにその個体に生じた出来事などを契機として個体名を変えることもしばしばあるという。

こうした個体名は基本的には家族以外には知られていない。他の世帯の牧夫はこうした個体名を持つ個体を使うことはないので知る必要はないからである。もちろん、現実には長い時間一緒に働いているので、知っていることが多い。また4, 9, 20, 24の備考の欄には公トナカイと書いてある。これは所有は国家（現在は事業体）にあるが、使用权はこのA世帯が持っていることを示している。使用权はこのA世帯の内の職業牧夫が騎乗の調教を施したが故に認められているもので、その人物によって個体名が付けられたのであった。使用权はその牧夫がこの飼育班で仕事をする限り認められるが、他の飼育班に移動になった場合は残していかなければならない。実際そうしたときには、代価のトナカイを公トナカイと埋め合わせることで、完全に自分の所有物にしてしまうことが多い。

6. 考 察

6.1. 調教がもたらす人と家畜関係

調教されることによって、個体識別が可能になった家トナカイは、分類原理自体がそうした家トナカイを基本的な対象として用いられ、さらにその中でも橇牽引先導用、騎乗用と搾乳用の雌という人との関係がより強い個体に対しては、個体名も付与されることを記してきた。トナカイの分類＝識別を理解するに当たっては調教ということが重要なポイントとなっている。この家畜トナカイの調教ということを考えるに当たって、エヴェンキの野生トナカイの馴化に関する興味深いフォークロアが知られている。

ある日エヴェンキの女性は子持ちの野生トナカイの雌が人のすみかの近くで食事をしているのに気がついた。それで彼女はテントの回りの様々な場所に排尿した。そのトナカイはそれをなめ、そうしている内に次第次第にその雌トナカイは人になれ、彼女が姿を現してもにげなくなった。ある日その女性はその雌トナカイに近づいていって、手で背中を触るようになった。さわっても静かなままでいたので、今度は手で搾乳した。そして乳を試して見た——うまかった (Василевич 1969: 79)。

このフォークロアで注目したいのは、野生トナカイの馴化が雌によって始まること、その誘因が人尿といった塩分にあること、さらにこれに引きつけられる形で雌トナカイは人との接触を許容し、搾乳をさせるという4つの点が明瞭に結びつけられて語られていることである。

人尿や塩が野生トナカイの馴化を促すという議論は古くから存在した (Laufer 1917: 141; Hatt 1919: 93)。また馴化の起源かどうかはともかくとして夏の害虫を防ぐための燻し火や天敵の狼が現れると家畜トナカイは宿営地に逃げてくるといったトナカイ側からみた人との共生の利点はこれまで様々な論者によって指摘されてきた (Василевич 1969: 75; Jochelson 1975(1908): 480)。そうした論点に加えて筆者が論じてきた調教＝個体識別の原理のようなものがこのフォークロアから読みとれるのである。すなわち野生トナカイの家畜化というものが雌トナカイを人尿という塩分をひきつけることではじまり、家畜が人の接触さらに搾乳を受け入れるという形で展開し

たことである²²⁾。先に述べた調教された家トナカイを構成する搾乳雌トナカイが、冬から人によって塩を与えられることで、調教雌と比べてもより一層、人との接触を許容するという事実とつながってくるように思われるのである。牧民の言葉によれば「塩を手から与え続けるから、(さわったりできるほど) 馴れるのだ」ということであった。さらにそうした関係が人の宿営地で実を結ぶ。搾乳は宿営地で雌が捕獲されつながれた状態で行われるし、特に去勢雄の場合、最初の調教というのが、人の宿営地につながれることによって始まることを記した。また宿営地で飼われている犬(牧用犬ではない)をも恐れなくなる。いわば人の存在だけでなくその生活領域そのものを調教トナカイはうけいれている(あるいはうけいれざるをえない)のである²³⁾。

6.2. 群の行動管理に必要な家トナカイとしての交通トナカイ

搾乳雌と騎乗トナカイといった牧夫に最も近い存在に対して、個体名を付与するような個体識別が行われていることがわかったが、騎乗トナカイの場合、個人トナカイ・公トナカイがともに調教されるのに対し、なぜ搾乳雌の場合は個人トナカイだけがその対象となるのだろうか。

先に耳印の分類において、仔トナカイに対する所有関係は、母子間の追隨行動を観察することによって規定されることをのべた。当然ながら私的所有の雌トナカイから生まれた雄にも同じ耳印が刻まれる。個人所有の雌の耳印というのは、人に調教された雌集団の子孫を表している。搾乳雌から生まれた雌トナカイに関しては母親同様に調教の対象となる。雌は性・年齢別名称に現れているように、1歳をすぎると、次ぎに妊娠しているかどうかは類別の基準となり、人の訓練は、生まれた時から継続的に続くからである。その意味で調教雌は母系ラインで系譜的につながっている。実際に搾乳雌及びその仔に対しては、牧夫たちは母子関係を把握しているのだ。

これに対し調教済みの去勢雄の場合は個人トナカイであっても搾乳メスに見られるような母子関係の把握がされているとはいいがたい。母親にぴったりと寄り添う半年ほどをすぎると、2歳で去勢を行い、それが調教個体として訓練の対象となるのは、十分体が成長した後である。雄の場合は牧夫によって訓練されるまで、雌のように継続的に牧夫によって毎日の搾乳作業で宿営地につなげられるような行動介入はされずにおかれる。その意味では母子関係の把握が一度切れた時点で、調教が施され、そこで個人トナカイの雌の系譜管理とは異質の個体識別がされている。これは表5にもあるように騎乗トナカイの場合、調教個体が必ずしも私的所有の家畜ではなく、公トナカイの場合もあることからもうかがえよう。特に賞与として公トナカイがもらえると

きには、仔トナカイを選ぶかあるいは、牧夫は自らが調教した公トナカイの騎乗個体を自分のものになっている。公トナカイの交通トナカイは毎年訓練され、作り出されていることは先ほども触れたとおりである。調教個体雄とくに騎乗トナカイについての個体識別では、母子関係の把握は原則的にはもとめないものである。さらに公トナカイの雌に対する牧夫たちの無関心に注目すると、個人トナカイの雌に対する牧夫の関心度の高さは一層明らかになる。耳印の記述で触れたように、個人トナカイの耳印が母仔の追従行動に注目して定まると比べると、公トナカイは公であることが重要であって、どの母獣から生まれたかどうかは注目されない。個人トナカイでは雄も含めて当初必要である母子関係の把握が第x飼育班という公的生産手段として位置づけられ、それらの仔の一部が交通トナカイへと調教されるわけである。そして公トナカイの雌自体は日常的な食料として、積極的に屠殺の対象にすらなっている。

筆者はすでに群の行動管理活動において、牧夫たちによって二つのカテゴリーが一日を単位とする放牧作業の対象となり群の輪郭が比較的閉じているサブグループ1と比較的粗放的に自由にされそれ自体群の輪郭が定まっていないサブグループnを使って説明したことがある(高倉 1996)。一言でいってしまうと、サブグループ1の存在が囿となってサブグループnを放牧地の中に引きつけ、あるいは囲いこむという効果があった。牧夫たちが群れ行動管理を行う上ではこのサブグループ1に騎乗トナカイを中心とする交通トナカイが含まれていれば十分である²⁴⁾。

実際に搾乳雌の存在は群の行動管理において必ずしも必要なものではない。職業牧夫に就職した牧夫たちによって必要とされたのは騎乗トナカイという移動手段の確保である。離合集散している大規模な群の周囲を囲いこむようにして、牧夫が考える範囲以上に散らせないという行動管理の上で、何よりも必要だったのは群を囲い込み、寄せ集めるための交通手段である。そのことは家族内での個人トナカイ分与のあり方——つまり放牧地で暮らすものだけが騎乗トナカイを必要とし、そうでないものは雌が与えられるという原則にも合致している。大規模な群の行動管理という点で何よりも必要なのは騎乗、牽引、駄載といった移動に直接関わる個体なのである。交通性という機能に注目する限り母子関係の把握はあまり問題ではない。いかに交通トナカイを調教するかという点が重要なのだ。

この点についてはサーミを調査したペインの指摘が示唆的である。彼によれば、両親の世帯から独立していない若者こそつらいハーディング活動=群の囲い込みと寄せ集めに専念する必要がある、世帯として独立するとむしろ家畜の資産管理といったハズバンドリー活動が中心となるという(Paine 1994: 102)。サーミにおいて見られる

独立の世帯を構成していない若者が群の行動管理にたずさわるという状況をソ連体制の文脈においてみると、公トナカイの資産管理は村の事務職の人々に任せ、職業牧夫はむしろもっぱら群の行動管理に従事していたということになる。それゆえ彼等によってその労働に必要な交通トナカイの確保が重要な意味を持つてくるのだ。

こうしてみると先に筆者が家トナカイと規定した家畜群は二つの論理が交差していることがわかる。騎乗トナカイを中心とする交通トナカイという存在、これは飼育班全体の群行動管理のための家トナカイである。個人トナカイのなかで調教を施した搾乳トナカイは同じ家トナカイといっても性質が異なっているのである。そのこの意味を次の節で考えていきたい。

6.3. 個人トナカイを作り出す牧夫たちの戦略

これまでの議論において家トナカイを構成する交通トナカイと搾乳トナカイ双方の調教がセットになって行われるように記述してきた。しかし筆者が滞在した飼育班ではA世帯だけによって行われていたことである。他の職業牧夫は搾乳を行わなかった。ソフホーズ時代からつづくそれぞれの世帯に属する成人男子の職業牧夫を中心とする飼育班の群管理においては、搾乳自体はそれほど一般的な光景ではない。毎日の放牧作業に従事する職業牧夫は、搾乳を行っている時間的な余裕はないのだ。とりわけ一頭のトナカイから 200~300 cc ほどの微量なため、自家消費用であり商品化の対象にはなっていない。そのため、牧夫の妻や母親が一時的に放牧地に滞在するときにも搾乳はされない。搾乳には調教が必要だからである。飼育班には牧夫の食事の世話などをする給仕係がいるが、その人が搾乳するかどうかは、本人次第なのである。

通常、放牧キャンプは飼育班の職業牧夫が基本的に男性だけのテントを張り、そこで給仕係（主に女性）が食事をつくり、寝食を共にする。ところがそんな中にあっても筆者がとりあげたA世帯はまさに「A世帯」とこれまで説明してきたように、同じ放牧キャンプ内の他の職業牧夫とは別に、あたかも家族で遊牧生活をしているように世帯でまとまりテントを張って暮らしていた。給仕係の女性は、その夫が現在は年金生活者になった職業牧夫であり、なおかつその息子二人（19と24歳）も職業牧夫として働いていた。彼等の場合、レーニンソフホーズの時代から夫婦二人で職業牧夫と給仕係として放牧地で暮らしていた。その妻が自らの世帯が所有する個人トナカイの雌に対して搾乳を行っていたわけである。夫婦で飼育班に雇われる場合は少なからずあるが、だからといって必ずしも搾乳を行っているとはいえない。繰り返しになるが、搾乳をするかどうかはきわめて個人的な選択なのである。

農業集団化において公トナカイが出現してから、肉・毛皮生産・流通・販売という家畜の資産管理は国家の手によってなされ、職業牧夫は家畜の行動・生殖・生育管理をまかされてきた。飼育班というのは理想的にはあくまでその職業牧夫から構成され、その家族と一緒に労働するという事は否定されてきた。ソビエト体制における生産秩序の最下部のレベルはこうした労働者であった。社会主義のイデオロギーにあって世帯はもはや生産の単位ではなく、もっぱら消費の単位なのだ (Humphrey 1983: 132)。個人トナカイという財産はこのソビエトの公式イデオロギーにあらがうものである。耳印についての記述で触れたように、個人トナカイの単位はあくまで世帯を中心としている。世帯が生産の単位であり続けること、それが個人トナカイ生産の意味なのである。

多くの職業牧夫の場合、ソビエトの労働論理に準じ、放牧キャンプで必要な交通用のトナカイを公トナカイ・個人トナカイともに作り続けてきた。私的財産としての個人トナカイの基礎をなすものは雌である²⁵⁾。耳印の記述で紹介した様に世帯内の家畜トナカイの分与は雄ではなく、雌を中心としていた。また表2からわかるように個人トナカイの場合、種雄が極端に少ない。これは公トナカイから選出される種雄に依存すれば、個人トナカイの雌も妊娠・出産することが可能であり、自分で種雄を確保する必要に迫られなかったのである。多くの牧夫たちは調教しない個人雌トナカイを生産し、その母子関係に注目し、自らの個人トナカイを見分けだし、育て、その中から交通トナカイだけを作りだしてきた。これと、公トナカイの去勢雄から交通トナカイへ調教したものをあわせた形で、群の行動管理に必要な家トナカイを形作ってきたのである。

ところがそんな中であっても筆者が取り上げたA世帯のような夫婦がソ連時代から職業牧夫と給仕係に就いた場合、世帯の中のだれか一人が職業牧夫についている場合よりも、より一層ソビエト生産体制の論理とは異なるあり方を基盤とする財産確保の戦略を用いることができた。彼等は自らの個人トナカイから交通トナカイを生産すると同時に、自らの所有する雌トナカイを搾乳雌へと調教し、搾乳雌が含まれる家トナカイを作り出していたのである。彼等が作り出す個人雌=搾乳トナカイは騎乗トナカイ以上の親密性が結果としてあらわれ、まさにエヴェンキのフォークロアにあったような人と家畜の密接な関係を編み出していた。同時にそのことは職業牧夫として求められる群の行動管理に対しても一定の効果があった。行動管理に必要な交通用の個体を中心とするサブグループ1に、騎乗雄と比べてさらに人への親和性が高い搾乳雌が組み入れられたことは、このサブグループ1が日周放牧作業として毎日宿営地へと

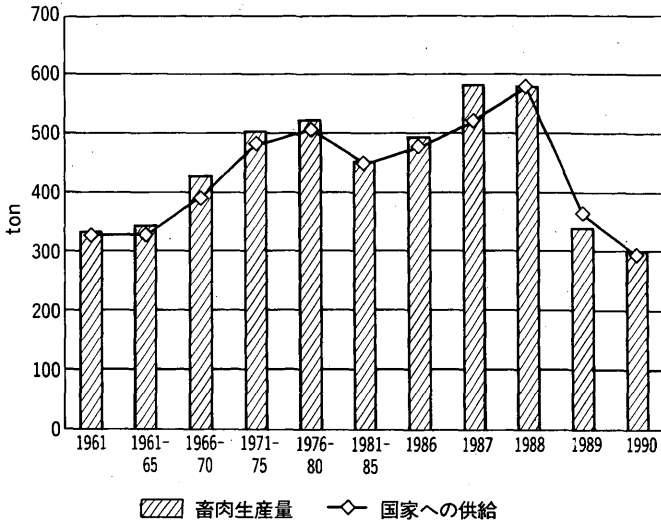
寄せ集めるなかで、その安定性をうながしたからである。搾乳雌は宿営地につれてこられると、まず塩をもらえる牧夫へと近寄ってさえいくのである。

1930年代の農業集団化で公式的には、いったん生産手段としてその存在を否定された個人トナカイであったが、牧夫達はソ連のイデオロギーとシステムに適応する形で自らのトナカイを増やしてきた。それは国家財産の公トナカイの群行動管理に必要な家トナカイの構成を公トナカイから個人トナカイへと移し換え続けてきたということに他ならない。交通用のトナカイという存在は、群れの行動管理の観点からすれば、まったく個人トナカイを必要としていない。現実には公トナカイが交通用として調教されているように、その数を一定数に維持すれば、群れの行動管理をはじめ畜産生産は技術上可能である。しかし牧民たちは、私的に所有する雌トナカイを維持することを基盤とし、搾乳雌すら作りだしながら、その雌の個人トナカイが再生産するオスを交通トナカイに調教してきた。それによって公トナカイの肉畜の増産に寄与してきたのであった。彼等は、集団化以前の状況と比べるとおそらく弱くなっていると推測できるが、畜産的大規模飼育にそれほど必要とされない分類・識別原理を、自ら所有する家トナカイに対して適用し、個体識別を行い個人トナカイをつくり続けてきたのである。言うなればエヴェンキ型な親密な家畜との関係は職業牧夫達による個人トナカイ生産プロセスの中にこそ見出すことが可能なのだ。ソビエト民族学が系統起源的に一括りにした北方ヤクートとエヴェンのトナカイ飼育は、この地域では以上のようなプロセスを経ながらソビエト体制をくぐり抜けてきたのである。

7. おわりに

ソ連の崩壊はこうした家トナカイの構成を公トナカイすなわちレーントナカイから個人トナカイへと変換するトナカイ牧夫のあり方そのものを変えつつある。それは市場経済と対面するなかで、レーントナカイという公的トナカイの存在の質そのものが変化せざるをえないからだ。表6は公トナカイの生産量＝屠殺したトナカイの重量と、ソフホーズのシステムに沿って国家が買い上げた量を示したものである。生産量と国家の購買量がほぼ一致している。これがソビエト時代の畜産的トナカイ飼育を支えていたのだ。さらに肉の売り上げに対して国家からの補助金も出されていた。ソ連の崩壊はこうした補助金体制の崩壊でもあり、シベリアのトナカイ飼育全般に大きな打撃を与えた (Polezer 1995: 212)。市場価値の低いトナカイ肉を生産しながら、しかもその採算自体が問われずに、生産単位として職業牧夫の世帯がなしたと、

表6 トナカイ肉生産と国家の買付(供給)(Archive #1)



それは個人トナカイをつくりだしていく営みだった。これを保証したのは皮肉にもソ連のシステムなのだった。

本稿は、ソ連時代に形成された畜産業としてのトナカイ飼育を、革命以前の状況との断絶という視点ではなく、持続的な視点で見たいこうとするものであった。ソビエト民族学は、ツンドラという生態条件と帝政ロシア植民地主義の結果、特定の民族の間で生み出された家畜トナカイの大規模飼育が生産経済となりえたかどうかを問題にし、それ以外ソ連時代の集団化によってはじめて畜産業としての大規模飼育が可能であるという「断絶」の立場をとってきた。その結果、革命以後の変化には十分な注意は支払われなかった。これに対し、筆者は「民族」を単位としては様々な事例を抽象化する方法ではなく、むしろ現在の複数の民族から構成される地域社会を分析単位として設定し、その史的状況を復元的に提示することで、畜産業へとつながる大規模飼育は当該地域社会においても——生産経済全体を形成するには至らなかったが——技術的には可能であり、畜産業となった中でもそうした技術は連続的に捉えることが可能なことを示してきた。ソ連の出現によってレーニントナカイと個人トナカイという所有の面でロシア革命以前と著しく異なる所有形態が表れたのは事実である。この二通りの生産手段所有のあり方を前提とし、それに適応する形で編み出されてきた家畜トナカイの分類・識別のあり方という群管理の技術的側面を、本稿は提示したのである。今回の議論では紙面の都合もあり、現在の脱社会主義下の具体的な状況を直

接論じるには至ってない。しかしこのように社会主義下で変容してきたトナカイ飼育の理解をふまえて、今日の状況へ迫ることが可能となるであろう。

注

- 1) ベレストロイカ期も含めてこうした視点からシベリア少数民族の伝統的生業の変化を分析しようとする試みはすでにいくつかなされている (Anderson 1991; 1992; 1994; Oshrenko 1995; Vitebsky 1992)。
- 2) 調査は1994年8月から10月、1995年5月から1996年4月、1997年8月の合計16カ月間にわたり、ベルホヤンスク山脈東麓に位置する行政集落バタガイアリタ及び旧ソフホーズ系事業体のトナカイ飼育班の放牧地を中心に行った。
- 3) サーミにおいても個体識別があることは報告されている (葛野 1990: 88-100, 120-135; Paine 1994: 22-24)。
- 4) この点は羊や山羊の放牧技術とトナカイ飼育が全く異なることを意味している。羊・山羊等の家畜の場合、群の輪郭そのものが牧夫と家畜相互の個体識別によって維持され、その群を追い立てることによって放牧地そして宿営地へ誘導するのが基本である (太田 1995; 谷 1996)。ところがトナカイの場合には羊などと同じ様な意味で群の輪郭を明確にし、維持していくことはない。むしろ群の輪郭は、放牧地の地形・生態環境を熟知し、彼等が想定した放牧領域外へ逃がさないように群を配置することによって保証される。そうした管理では毎日管理している家畜をすべて確認する必要はない。むしろどこに群が移動しているかを知り続けうることが、群の輪郭を明確化する。その意味では交通用トナカイさらに牧夫自身の足といった移動能力の確保が重要である。つまり家畜に対して個体識別はされるが、それ自体が群の輪郭の明確化を保証せず、個体識別の意味が羊や山羊などとは基本的に異なっているように思われる。
- 5) エヴェンキについては文字どおり小規模な家畜数で女性によって世話され、監視なしの状態でも群が放たれても家畜自らが戻ってくるエヴェンキ型とやや大規模で群が監視なしで解放されることなく、放牧されるオロチョン型がある (Василевич 1969: 75-77)。なおここでいう「エヴェンキ型」とはエヴェンキの間で二つに類型化されるトナカイ飼育の方法であって、2.3.以降で述べるトナカイ飼育の系統起源分類に基づく「エヴェンキ型」とは異なるものである。
- 6) この分類は物質文化などを基盤にしたトナカイ飼育の系統起源に基づくものである。5つの分類があり、エヴェン・エヴェンキ・ヤクート等の「エヴェンキ型」、トゥバ等が含まれる「サヤン型」、「ネネツ型」「チュクチ型」さらに「サーミ型」がある。この分類が起源を基準にしたものであるのに対し、先の2つの類型は生業類型を基準としているが事実上これらは相互にかみ合っている。「エヴェンキ型」「サヤン型」がタイガ小規模飼育型をなし、ツンドラ大規模飼育としては「ネネツ型」「チュクチ型」「サーミ型」という具合である。なおサーミは旧ソ連のコラ半島にも居住している。この議論については Левин и Василевич (1951)、日本語による紹介については佐々木 (1985) が参考になる。
- 7) 93年においてバタガイアリタではエヴェンでヤクート語を母語とみなしているのは96パーセントに及ぶ (齋藤 1996: 42)。

- 8) ソ連の出現によって「トナカイ飼育民北方ヤクートは姿を消し、ヤクートネイションへと近づいていった」と1960年代にグルヴィッチが述べているように (Гурвич 1963: 90)、現在ヤクーチア全体においてトナカイ飼育といえば、ヤクート以外の「北方少数民族」の伝統生業という位置づけが一般的に流布している (cf. Черский 1968: 30)。調査地のトナカイ牧夫の民族籍は圧倒的にエヴェンの比率が高い。しかし本文にあるように職業としてのトナカイ牧夫は住民すべてが希望するれば就ける開かれたものであり、これをエヴェンかヤクートかといった民族別に考えると、彼等の経済活動そのものの理解が困難になる。
- 9) このことは他地域でも確認できる (Попов 1952: 142)。
- 10) ヤクーツクにそうした専門学校があり、この専門学校出身の年金生活をしているヤクートの男性はかつてレーニン・ソフホーズに属するすべてのトナカイ飼育班の責任者であった。ちなみに1950年代終わりにシベリアを調査した西側研究者によれば、そうした「群チーフ」は4年間の専門学校で教育を受け、全ソ連レベルの集団農場長官ないし国営農場委員会議長の直属下にあったことが報告されている (Alaruikka 1959: 407)。
- 11) 以下特に言及しない限り、数え年で家畜の年齢を表す。またキリル字の転写について特にヤクート語・エヴェン語にしか使われない字の転写については以下の原則の下におこなった。5は gg, ŋ は ng, θ は ö, h は h, Y は ü である。
- 12) 例えばオホーツク地域のエヴェンでは雌に対しては不妊雌 mangay, 妊娠中の雌 xurk', 早産した雌 gulk', 生理がなくなった雌 k'tt'm という細かな区別がある (Попова 1981: 93)。
- 13) ヤクートが優れたトナカイ飼育民であることが先に記したが、彼等は牛馬飼育の伝統に基づき、彼等が好む雄と雌を交配することによって、19世紀に彼等の間で高い価値がつけられていた斑状毛皮のトナカイをつくりだしていた (Jochelson 1975(1926): 363)。筆者の調査地においてそうした交配は行われておらず、斑状の毛皮を持つ個体はきわめて少なかった。
- 14) それぞれの部分名称とその場所については拙稿内の図を参照 (高倉 1997: 80)。
- 15) 例えばサーミの場合角の加工は行われませんが、毎年生え変わる角の形が同じであることに注目し、それによって個体を識別するという (Paine 1994: 22)。また角とは直接関係ないが騎乗トナカイを個体識別するという点について「満洲」のエヴェンキの場合、鞍や籠が特定の個体専用になっており、その個体が死ぬまでそれらは使われる (Lindgren 1935: 224)。
- 16) 革命以前のベルホヤンスク地域のエヴェンでは耳印を刻むため切り離した耳の切れ端を糸に通していた。この糸は2メートル程の長さがあり、1000頭分の耳の切れ端を通すことができた。あるエヴェンはこうした糸を16も持っていた (Худяков 1969: 99)。現代においてもこうした方法は見られる。公トナカイの新生児がうまれ、その耳印を7月初旬には刻むが、切り取られた耳は糸で通され、公トナカイの新生児が何頭出産したのか確認している。
- 17) 耳印の台帳や刻み方の言及についてはサーミやトッパで報告されている (葛野 1989; 稲村 1994)。
- 18) 筆者が滞在した飼育班では若雄に対する去勢の他に、晩夏には「年老いた種雄 (blaakh)」に去勢が施される。この理由は老齢化した雄を生殖管理の対象から外すため、その個体は naaga と呼ばれる。このときにもナイフでの切除法が用いられている。ちなみにいずれの去勢においても、現在去勢儀礼のようなものは行われていない。
- 19) 例えばエヴェンキの場合駄載用の調教は2歳から、騎乗用は4～5歳からはじめられる (Василевич 1969: 72)。オホーツクのエヴェンの場合去勢雄と不妊雌に対して2-3才から行われ、最初駄載訓練から始まり次いで騎乗がおこなわれた (Попова 1981: 86)。

- 20) 例えば「満州」のエヴェンキの家畜トナカイにおいて、人の訓練を十分受け入れられないような個体は、儀礼や食料不足の際に真っ先に屠殺される (Lindgren 1935: 225)。またサーミの場合も牽引の訓練を拒否するような個体は殺して食用にされるという (Paine 1994: 80-82)。
- 21) 革命前、ベルホヤンスク地方のエヴェンの搾乳は、搾乳個体が人になれていれば頭部を抱えるだけで、首輪を紐で木に結びつけない状態でも搾乳が行われたことが記されている (Худяков 1969: 105)。この記述も搾乳個体と牧民との密接な関係を表していると考えられるだろう。
- 22) インゴールドはエヴェンキ的な家畜トナカイと人との親密性の確立を、彼等が搾乳を行うことと結びつけて考えている。タイガの豊富な食糧資源を持つ生態条件において、人と家畜関係が密で減次に家畜を殺さない「乳牧畜 *milch pastoralism*」と考え、一方家畜と人との非親密な関係を維持しながら、開けた地形のツンドラとその狩猟型食糧資源の低さという生態的な環境条件の中で大規模な群による「肉牧畜」(*carnivorous pastolarism*) と論じた (Ingold 1980)。
- 23) この点に関してエヴェンキの場合例えば宿営地からいなくなった家畜トナカイが、以前の宿営地をおぼえていてそちらの方に逃げていたりすること (Василевич 1969: 72) や革命以前の北方ヤクートの場合には宿営地で飼われている犬を調教トナカイはおそれなくなること (Jochelson 1975(1908): 480-481)、および狼が現れたり夏の蚊の発生時期には自ら宿営地に戻ってくるという (Jochelson 1975(1926): 367)。
- 24) サブグループ 1 には家トナカイが多く含まれるが、その他に未調教の個体も混じっており、逆にすべての調教個体がサブグループ 1 に含まれているわけではない。サブグループ 1 とはあくまで日周放牧作業において牧夫が放牧地から寄せ集める行動群を指す概念である。
- 25) ヨヘリソンがギシンガー-オホーツク地方の「ツングース」のトナカイ数を聞いたときに、彼等は仔トナカイや雄を考慮せずに、雌だけを数えたという報告 (Jochelson 1975(1926): 364) は興味深い。

文 献

- Alarukka, Y.
1959 Reindeer Husbandry in the Soviet Arctic, 1958. *Polar Record* 67, 404-407.
- Алексеев, А. А.
1994a *История и культура эвенов северного западного Верхоянья* (Автореферат Десертаций на соискание ученой кандидата исторических наук). Якутск: Издательство ЯГУ.
1994b *Экологический календари эвены* (1)-(6). *Северные просторы* (1), 41-43, (2), 31-34, (3), 16-19, (4), 34-36, (5), 35-36, (6), 37-38.
- Anderson, D.
1991 Turning Hunters into Herders: A Critical Examination of Soviet Development Policy among the Evenki of Southeastern Siberia. *Arctic* 44(1), 12-22.
1992 Property Rights and Civil Society in Siberia: An analysis of the Social Movements of the Zabaikal' skie Evenki. *Praxis International* 12, 83-105.
1994 The Aboriginal Peoples of the Lower Yenisey Valley: An Ethnographic Overview of Recent Political Developments in the North Central Siberia. *Polar Geography* 19(3), 184-218.
- Bogoras, W.

- 1901 The Chukchi of Northeastern Asia. *American Anthropologists* 3, 80-108.
- 1904-09 *The Chukchee* (Memoirs of the American Museum of Natural History v.11). New York & London: Johnson Reprint Corporation.
- Черский, Н. В. и т.д. (ред.)
1968 *Экономика и культура народов севера Якутии*. Москва: Наука.
- Дуткин, Х. И.
1990 *Тематический эвенско-русский словарь для оленевод*. Якутск.
- Гогорев, З. В.
1957 Восстановление народного хозяйства Якутской АССР (1923-1925гг.). в кн. Поляков, Ю.А. и З.В. Гоголев (ред.) *Очерки по истории Якутии советского периода*, стр. 122-152. Якутск: Якутское Книжное Издательство.
- Гурвич, И. С. (Gurvich, I. S.)
1956 Эвены Тюгясиры. *Краткие сообщения института этнографии им. Н.Н. Микиклохо Маклая* 25, 42-55. Москва: Наука.
1960 Эвены Камчатской области. *Современное хозяйство, культура и быт малых народов Севера* (Труды института этнографии им. Н.Н. Микиклохо Маклая новая серия, том 56), стр. 63-91. Москва: Наука.
1961 Directions to be taken in the Further Reorganization of Economy and Culture of the Peoples of the North. *Soviet Anthropology and Archeology* 1(2), 22-31.
1963 Current Ethnic Process taking place in Northern Yakutia, trans. by E. L. Davis. *Arctic Anthropology* 1(2), 86-92.
1966 *Этническая история северо-востока Сибири*. Москва: Наука.
1977 *Культура северных якутов-олeneводо*. Москва: Наука.
- Hajdu, P.
1963 *The Samoyed Peoples and Languages*. The Hague: Mouton & Co. Ltd.
- Hatt, G.
1919 Notes on Reindeer Nomadism. *Memoirs of the American Anthropological Association* 6, 75-133.
- Humphrey, C.
1983 *Karl Marx Collective: Economy, Society and Religion in a Siberian Collective Farm*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 稲村哲也
1994 「タイガとステップが会おうところ——モンゴル最北部のトナカイ遊牧」『季刊民族学』70: 28-43.
- Ingold, T.
1980 *Hunters, Pastoralists and Ranchers: Reindeer Economies and their Transformations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jochelson, W.
1933 *The Yakut* (Memoirs of the American Museum of Natural History v.33-2). New York: The American Natural Museum of History.
1975(1908) *The Kolyak* (Memoirs of the American Museum of Natural History v.6). Leiden & New York: AMS Press, Inc..
1975(1926) *The Yukagir and the Yukaghirized Tungus* (Memoirs of the American Museum of Natural History v.9). Leiden & New York: AMS Press, Inc..
- Khazanov, A. M.
1983 *Nomads and the Outside World*, trans. by J. Crookenden. Cambridge: Cambridge University Press.
- Худяков, И. А.
1969 *Краткое описание Верхоянского округа*. Ленинград: Наука.
- Крупник, И. И. (Krupnik, I. I.)
1976 Становление крупнотабунного оленеводства у ненцев. *Советская этнография* 1976(2), 57-69.
1988 Economic Patterns of Northern Siberia. In Fitzhugh, W. W. & A. A. Crowell (eds)

- Crossroads of Continents: Culture of Siberia and Alaska*, pp. 183-191. Washinton, D.C. & London: Smithsonian Institution Press.
- 1992 Classification of Siberian Nomadism: Traditional Patterns and Modern Transformation. In Hokkaido Museum of Northern Peoples (eds) *Sedentary and/or Migratory Life in the North* (The Proceeding of the 6th International Abashiri Symposium), pp. 27-40. Abashiri: Association for the Northern Cultural Promotion.
- 1993 *Arctic Adaptations: Native whalers and Reindeer Herders of Northern Eurasia*, trans. by Levenson, M. Hanover and London: Dartmont College.
- Kuoljok, K. E.
1985 (1979) *The Revolution in the North: Soviet Ethnography and Nationality Policy*, trans. by Gray, T. J. M. and N. Tomkinson. Stockholm: Almqvist & Wiiksell International.
- Кузнецов, А. И. и Л. И. Миссонова
1993 *Этносоциальное положение эвенов в Эвено-Бытантайском районе Якутии* (Межнациональные отношения в современном мире, серия А, Документ Н-35). Москва: Институте этнологии и антропологии РАН.
- 葛野浩昭
1989 「トナカイの耳印と遊・放牧社会の歴史——フィンランド、ウツヨキ地域のトナカイ放牧組合を例に」『民族学研究』54(2), 113-136。
1990 『トナカイの社会誌』東京：河合出版。
- Laufer, B.
1917 The Reindeer and its Domestication. *Memoirs of the American Anthropological Association* 4(2), 91-147.
- レヴェージェフ, V. V. ・シムチャンコ, Yu. B.
1990 (1983) 『カムチャトカにトナカイを追う——チュクチャ族の自然と伝説』齊藤君子訳, 東京：平凡社。
- Leeds, A.
1969 Reindeer Herding and Chukchi Social Institutions. In Leeds, A. and A. P. Vaida (eds) *Man, Culture, and Animals*, pp. 87-128. Washington, D.C.: American Association for the Advancement of Science.
- Левин, М. Г. и Б. А. Васильев
1956 Эвены, в кн. Левин, М. Г. и Л. П. Потапов (ред) *Народы Сибири*, стр. 760-775. Москва-Ленинград: Наука.
- Левин, М. Г. и Г. М. Василевич
1951 Типы оленеводства и их происхождение. *Советская этнография* 1951(1), 63-87.
- Левин, М. Г. и Н. Н. Чебоксаров
1955 Хозяйственно-культурные типы и историко-этнографические области (К постановке вопроса). *Советская этнография* 1955(4), 3-17.
- Lindgren, E. L.
1935 The Reindeer Tungus of Manchuria. *Journal of the Royal Central Asian Society*, 22(2), 221-231.
- 松園万亀雄
1962 「ソヴェト民族学における『経済・文化型』および『歴史・民族誌的領域』の概念——シベリア諸族の研究を中心として」『社会人類学』3(3), 73-82。
- メドヴェージェフ, Z. A.
1995 『ソヴェト農業1917-1991——集団化と農工複合の帰結』佐々木洋訳, 札幌：北海道大学図書刊行会。
- Mironov, N. T.
1945 Notes on the Domestication of Reindeer. *American Anthropologists* 473, 393-408.
- Oshrenko, G.
1995 Property Rights and Transformation in Russia: Institutional Change in the Far North. *Europe-Asia Studies* 47-7, 1077-1108.
- 太田 至
1995 「家畜の群管理における『自然』と『文化』の接点」福井勝義編『講座地球に生きる4)

- 自然と人間の共生』pp. 193-224, 東京: 雄山閣。
- Paine, R.
1994 *Herds of Tundra: a Portrait of Saami Reindeer Pastoralism*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Polezer, G.
1995 Devolution, Constitutional Development, and the Russian North. *Post-Soviet Geography* 36(4), 202-214.
- Попов, А. А.
1935 Оленеводства у долган. *Советская этнография* 1935(4, 5), 185-205.
1948 *Нганасаны, вып. 1. материальная культура* (Труды института этнографии, новая серия том 3). Москва и Ленинград: Наука.
1952 Качевая жизнь и типы жилищ у долганов. *Сибирский этнографический сборник, том 1* (Труды института этнографии, новая серия том 18), стр. 142-172.
- Попова, У. Г.
1981 *Эвены Магаданской области: очерки истории, хозяйства и культуры эвенов Охотского побережья, 1917-1977гг.* Москва: Наука.
- 齋藤晨二
1996 「ヴェルホヤンスキー山脈東麓のエヴェン人」井上紘一編『〈スラブ・ユーラシアの変動〉領域研究報告輯: 民族の共存を求めて(1)』pp. 38-49, 北海道大学スラブ研究センター。
- 佐々木史郎
1984a 「シベリアのトナカイ遊牧——西シベリア, ネネツ族の事例とその経済的意義の考察」『季刊人類学』15(3), 114-180。
1984b 「ネネツ族の社会——トナカイ飼養の発展とその影響」『民族学研究』49(3), 203-232。
1985 「トナカイ飼育の歴史」『民博通信』30, 85-94。
1991 「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域——レヴィン, チェボクサロフの『経済・文化類型』と『歴史・民族誌的領域』の再検討」『国立民族学博物館研究報告』16(2), 261-309。
- Сорошевский, В. Л.
1993(1896) *Якуты: опыт этнографического исследования*. Москва: РОССРЕН.
- シシュロ, В. Р.
1995(1994) 「シベリアの原住諸民族と新ロシア」井上紘一訳『北海道立北方民族博物館研究紀要』4, 140-155。
- シロコゴロフ, S. M.
1941(1935) 『北方ツングースの社会構成』川久保悌郎・田中克己訳, 東京: 岩波書店。
- Slezkine, Y.
1994 *Arctic Mirrors: Russia and the Small Peoples of the North*. Ithaca: Cornell University Press.
- 高倉浩樹
1996 「東シベリア・トナカイ飼育業における放牧活動及びその技術に関する予備的考察」齋藤晨二編『シベリアへのまなざし—シベリア牧畜民の民族学的研究』pp. 108-126, 名古屋市立大学教養部。
1997 「角の民族誌: 東シベリア, サハ共和国のトナカイ飼育」『季刊民族学』80, 74-89。
1998 「脱社会主義下のトナカイ飼育業の再編——東シベリア・北部ヤクーチアの一地域社会の形成とその変遷」『民族学研究』63(1), 19-43。
- Takakura, H.
n.d. *Becoming a Soviet Village, then taking off the Soviet Village: An Experience among the population of Northern Yakutia focused on the Local Politics*. *Arctic Anthropology* (1998 2nd edition).
- 谷 泰
1996 「考古学的意味での家畜化とは何であったか——人・羊/山羊間のインターアクションの過程として」『人文学報』(京都大学) 76, 229-274。

- Токарев, С. А. и И. С. Гурвич
1956 Якуты, в кн. Левин, М.Г. и Л. П. Погапов (ред.) *Народы Сибири*, стр. 267–328, Москва-Ленинград: Наука.
- Токарев, С. А., З. В. Гогорев и И. С. Гурвич (ред.)
1957 *История Якутской АССР том 2, Якутия от 1630-х годов до 1917г.* Москва: Наука.
- Туголуков, В. А.
1971 Эвены. *Вопросы истории* 1971(3), 214–219.
- Угарова, Г. С.
1993 *Русско-якутский словарь биологических терминов.* Якутск: Министерство образования Республики Саха (Якутия).
- Vainstein, S. I.
1980 *Nomads of South Siberia: the Pastoral Economies of Tuva.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Василевич, Г. М.
1969 *Эвенки: историко-этнографические очерки (18-начало 20 в.).* Ленинград: Наука.
- Vitebsky, P.
1989 Perestroika among the Reindeer Herders. *Geographical Magazine*, June 1989, 22–25.
1990a Centralized Decentralization: the Ethnography of Remote Reindeer under Perestroika. *Cashiers du Monde russe et sovietique* 31(2/3), 345–356.
1990b The Yakut. In Smith, G. (ed.) *The Nationalities Questions in the Soviet Union*, pp. 304–319. New York & London: Longman.
1992 Landscape and Self—Determination among the Eveny: the Political Environment of Siberian Reindeer Herders Today. In Croll, E. and D. Parkin (eds) *Bush Base, Forest farm: Culture Environment and Development*, pp. 223–246. Routledge.
- Whitaker, I
1981 Tuvan Reindeer Husbandry in the Early 20th century. *Polar Record* 127, 337–351.
- Zhigunov, P. S. (ed.)
1968(1961) *Reindeer Husbandry*, trans. by M. Fleischman & ed. by Y. Dinur. Jerusalem: Israel Program for Scientific Translations.

**Unpublished documents

Archive #1

Экономические анализы 1988 «Агрофильма Ленинский»

Archive #2

АКТ Пересчета Частонного Сектора (стадо #1–3, 12 Окт. 1993г, стадо #4–6, 7 Ноя. 1993г) «Местной администрация Тюягирского наслега»

Archive #3

Отчет движений оленей, 1995, стадо #3, #4, #5, #6. <privately from some brigadiers>